

# 有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成29年4月1日  
(第59期) 至 平成30年3月31日

セブン工業株式会社

岐阜県美濃加茂市牧野1006番地

(E00633)

# 目次

頁

表紙

第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	5
5. 従業員の状況	5
第2 事業の状況	6
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	6
2. 事業等のリスク	7
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	9
4. 経営上の重要な契約等	13
5. 研究開発活動	13
第3 設備の状況	14
1. 設備投資等の概要	14
2. 主要な設備の状況	14
3. 設備の新設、除却等の計画	15
第4 提出会社の状況	16
1. 株式等の状況	16
(1) 株式の総数等	16
(2) 新株予約権等の状況	16
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	16
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	16
(5) 所有者別状況	17
(6) 大株主の状況	17
(7) 議決権の状況	18
2. 自己株式の取得等の状況	18
(1) 株主総会決議による取得の状況	18
(2) 取締役会決議による取得の状況	19
(3) 株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容	19
(4) 取得自己株式の処理状況及び保有状況	19
3. 配当政策	20
4. 株価の推移	20
5. 役員の状況	21
6. コーポレート・ガバナンスの状況等	24
第5 経理の状況	30
1. 財務諸表等	31
(1) 財務諸表	31
(2) 主な資産及び負債の内容	56
(3) その他	59
第6 提出会社の株式事務の概要	60
第7 提出会社の参考情報	61
1. 提出会社の親会社等の情報	61
2. その他の参考情報	61
第二部 提出会社の保証会社等の情報	62
[内部統制報告書]	
[監査報告書]	

## 【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	東海財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【事業年度】	第59期（自平成29年4月1日至平成30年3月31日）
【会社名】	セブン工業株式会社
【英訳名】	SEVEN INDUSTRIES CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 田中 太郎
【本店の所在の場所】	岐阜県美濃加茂市牧野1006番地
【電話番号】	0574-28-7800（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 管理本部長 阿部 正義
【最寄りの連絡場所】	岐阜県美濃加茂市牧野1006番地
【電話番号】	0574-28-7800（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 管理本部長 阿部 正義
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号）

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

回次	第55期	第56期	第57期	第58期	第59期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	13,092	13,018	12,557	13,518	14,090
経常利益 (百万円)	281	106	138	326	372
当期純利益 (百万円)	286	110	126	266	332
持分法を適用した場合の投資利益 (百万円)	—	—	—	—	—
資本金 (百万円)	2,473	2,473	2,473	2,473	2,473
発行済株式総数 (千株)	15,577	15,577	15,577	15,577	1,557
純資産額 (百万円)	5,401	5,491	5,617	5,838	6,126
総資産額 (百万円)	11,553	11,643	11,308	11,134	11,575
1株当たり純資産額 (円)	362.32	368.43	377.00	3,919.45	4,113.96
1株当たり配当額 (円)	—	—	2.00	3.00	31.00
(うち1株当たり中間配当額)	(—)	(—)	(—)	(1.00)	(1.00)
1株当たり当期純利益金額 (円)	19.21	7.41	8.46	178.90	223.48
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	46.8	47.2	49.7	52.4	52.9
自己資本利益率 (%)	5.4	2.0	2.3	4.7	5.6
株価収益率 (倍)	7.5	18.2	13.1	8.9	7.5
配当性向 (%)	—	—	23.6	16.8	17.9
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	237	173	669	365	305
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△141	△322	△193	△272	△138
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△103	110	△431	△130	△188
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	771	733	777	740	718
従業員数 (人)	377	392	397	388	383
[外、平均臨時雇用者数]	[63]	[69]	[68]	[75]	[75]

(注) 1. 当社は連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4. 配当性向について、第56期以前は配当の支払がないため記載しておりません。

5. 持分法を適用した場合の投資利益について、第57期以前は関連会社がないため記載しておりません。第58期及び第59期については、利益基準及び利益剰余金基準からみて重要性が乏しい関連会社であるため記載しておりません。

6. 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。これに伴い、発行済株式総数は14,019,750株減少し、1,557,750株となっております。

7. 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。第58期の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額を算定しております。
8. 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。第59期の1株当たり配当額31.00円は、株式併合前の1株当たり中間配当額1.00円と当該株式併合後の1株当たり期末配当額30.00円を合算した金額となっております。従って株式併合前の1株当たりの年間配当額は4.00円相当であり、株式併合後換算の年間配当額は40.00円相当であります。
9. 第59期の1株当たり配当額31.00円には、特別配当10.00円を含んでおります。

## 2 【沿革】

年月	概要
昭和36年2月	丸七白川口市売木材(株)を設立し、東洋林業(株)東洋木材市場の浜問屋として木材市売業を開始
昭和50年12月	(株)白川口へ木材市売業務を営業譲渡
昭和51年6月	商号を丸七住研工業(株)に変更
昭和51年7月	本店を愛知県春日井市から、岐阜県加茂郡白川町に移転
昭和51年10月	(名)丸七白川口製材所(現、(株)丸七)から、同社が昭和41年4月に生産開始していた集成材部門の営業権を譲受、集成材の生産を開始するとともに、日本集成材工業会(現、日本集成材工業(協))の会員資格を承継
昭和51年10月	白川第一工場(現、廃止)、白川第二工場(現、白川工場)及び七宗工場(現、七宗第一工場)を設置
昭和51年10月	名古屋支店(現、中部営業所)を設置
昭和51年12月	造作用集成材、化粧ばり造作用集成材及び構造用集成材のJAS認定(七宗工場)
	東京事務所(現、東京営業所)を設置
昭和52年4月	大阪出張所(現、大阪営業所)を設置
昭和60年4月	構造用大断面集成材工場を建設
昭和61年3月	一級建築士事務所を開設
昭和61年4月	建設大臣の認定を受けた構造用大断面集成材による自社工場(七宗第二工場)を建設
昭和62年4月	構造用大断面集成材(甲種、乙種)のJAS認定(大断面工場)
昭和63年3月	住宅用木質パネルの生産を目的とした、丸七ミヤマ工業(株)を設立
昭和63年4月	本店を岐阜県加茂郡七宗町に移転
昭和63年10月	白川林材生産(協)から工場を買取り、七宗第三工場を設置
平成元年3月	特定建設業の許可
平成元年5月	美濃加茂工場を建設(現、美濃加茂第一工場)
平成2年4月	企業イメージの確立を図るため、セブン工業(株)に商号変更
平成3年5月	名古屋証券取引所市場第二部に上場
平成4年5月	美濃加茂第二工場を建設
平成5年6月	丸七ミヤマ工業(株)から土地、建物を買取り、美濃加茂第三工場を設置
平成8年4月	和室、特注部材の生産を目的とした、(株)オバラシマリスの株式取得
平成8年6月	本店を岐阜県美濃加茂市に移転
平成9年5月	美濃加茂物流加工センターを建設(現、美濃加茂第四工場)
平成12年1月	ISO9001の認証取得
平成12年3月	東京証券取引所市場第二部に上場
平成13年7月	本社機能を岐阜県美濃加茂市から名古屋市中区に移転
平成16年3月	当社の株式の公開買付により、住友商事(株)が議決権の50.7%を取得(現、議決権の所有割合20.6% 主要株主)
平成16年4月	美濃加茂市に資材物流センターを建設
	ISO14001の認証取得
平成16年8月	本社機能を名古屋市中区から岐阜県美濃加茂市に移転
平成19年3月	(株)オバラシマリスと合併契約書を締結
	丸七ミヤマ工業(株)及び(株)オバラシマリスを完全子会社化
平成19年6月	(株)オバラシマリスを吸収合併
平成20年1月	丸七ミヤマ工業(株)と合併契約書を締結
平成20年4月	丸七ミヤマ工業(株)を吸収合併
平成20年11月	構造用集成材及び構造用大断面集成材の生産を中止
平成22年1月	パナソニック電工岐阜(株)(平成22年7月解散)の株式をパナソニック電工(株)(現、パナソニック(株))に譲渡
平成27年2月	住友商事(株)が保有していた当社株式の一部を都築木材(株)(議決権の所有割合16.0% 主要株主)及び西垣林業(株)(議決権の所有割合14.0% 主要株主)に譲渡
平成29年3月	CAD設計積算を主な事業としたベトナム企業であるS.E.V.E.N - VIET INDUSTRIES JOINT STOCK COMPANY(現、J-VIET JOINT STOCK COMPANY)の株式取得(資本金6,000,000,000 VND 当社出資比率39.9%)

### 3 【事業の内容】

当社の企業集団等は、当社及び子会社1社、関連会社1社の計3社により構成されており、集成材等を使用した住宅部材を品目別に生産販売しているほか、不動産の賃貸管理を行っております。

当社の事業内容及び当社と関係会社の当該事業に係る位置付けは次のとおりであります。

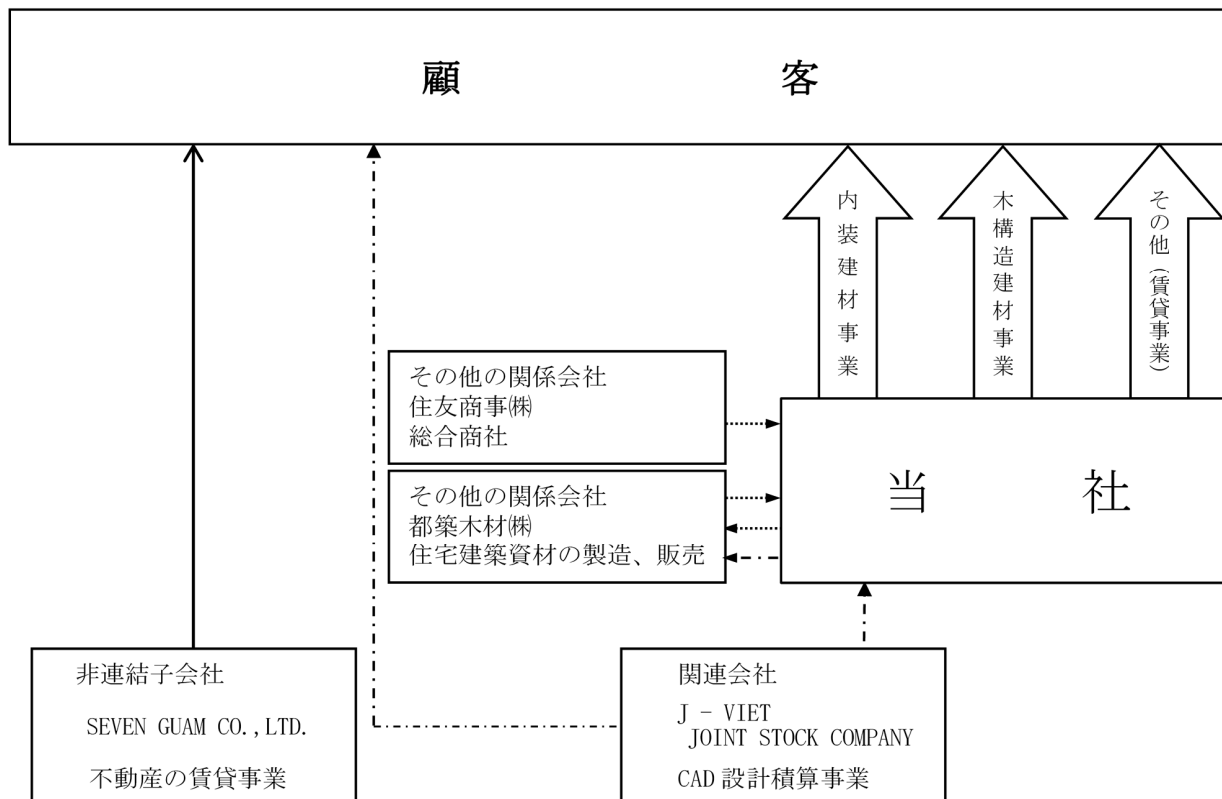
また、次の各事業は「第5 経理の状況 1 財務諸表等 (1) 財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

内装建材事業・・・内装部材（階段・手摺・カウンター・和風造作材・框・洋風造作材）

木構造建材事業・・・構造部材（プレカット加工材・住宅パネル）・施設建築

その他・・・・・・・・・・賃貸事業（不動産の賃貸管理）

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) 1. J - VIET JOINT STOCK COMPANYは、平成29年6月に商号変更しております。

2. .....→ 製品、原材料  
 → 賃貸  
 - - - - -→ 設計積算業務他

#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 又は被所有割合 (%)	関係内容
(その他の関係会社) 住友商事㈱ (注) 1. 2	東京都 中央区	219,278	総合商社	被所有 20.9 (0.3)	当社は木質建材を仕入れております。 役員の兼任…無 出向受入…3名
都築木材㈱	長野県 伊那市	20	住宅建築資材の製造、販売	被所有 16.0	当社は製品の販売及び木質建材を仕入れております。 役員の兼任…有 出向受入…1名

(注) 1. 有価証券報告書を提出しております。

2. 議決権の所有割合又は被所有割合の( )内は、間接所有割合で内数で記載しております。

3. 上記以外に非連結子会社1社及び持分法非適用関連会社が1社あります。

#### 5 【従業員の状況】

##### (1) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数 (人)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
383 [75]	41.0	15.3	4,770,600

セグメントの名称	従業員数 (人)
内装建材事業	270 [54]
木構造建材事業	92 [16]
報告セグメント計	362 [70]
その他	1 [-]
全社(共通)等	20 [5]
合計	383 [75]

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数は[ ]内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 60歳定年制度を採用しております。ただし、本人が希望する場合には、嘱託として採用しております。

4. 全社(共通)等として記載されている従業員数は、本社管理部門に所属しているものであります。

##### (2) 労働組合の状況

当社には、労働組合は結成されておきませんが、労使関係は円満に推移しております。



## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

#### (1) 経営方針

当社は「真実と努力」「行持報恩」を基本理念とし、真実の道理に従って行動し、公正、透明性など企業倫理に基づいた企業活動の実践によって、当社を取り巻く全てのステークホルダー（あらゆる利害関係者）から信頼を得る事業の創生及び構築を基本姿勢としております。

そして、「顧客に最大の満足と安心」を品質方針に掲げ、お客様のニーズに即応する快適商品の創造、供給を図るとともに、「地球環境との共生」を果たすため環境方針を定め、そのマネジメントシステムを構築し、積極的な事業展開を図ってまいります。これらにより持続的発展が可能な会社の実現と企業価値の最大化に邁進してまいります。

#### (2) 経営戦略等

これまで、日本の新設住宅着工戸数は少なくとも100万戸を維持してまいりましたが、この数年は個人消費の低迷の影響などにより80万戸から90万戸程度の水準に落ち込み、将来的にも少子高齢化や人口減少の進行に伴い、新設住宅着工戸数は更に低い水準で推移していくものと予測されております。このような厳しい環境における商品構成や生産体制など事業構造の転換を図っていく必要性に迫られております。縮小する市場環境に対応すべく、階段やカウンターなど特注対応をメインとした当社が強みを発揮できる事業強化を図ります。リフォーム市場や非住宅分野など伸びが見込まれる領域への展開も含め、機動的な事業運営により、環境変化に耐えうる経営基盤の構築に努めてまいります。特に木質建材における非住宅分野の需要開拓は、業界を挙げての課題となっており、木構造建材事業においてこれまで以上に経営資源の集中を図るとともに内装建材事業においても非住宅向けの製品開発を進めてまいります。

耐震や省施工、環境といった住宅のニーズに対し、プレカットや住宅パネルといった事業領域において、新商品開発、新サービスの提供など継続的に新たなビジネスを展開してまいります。また、国策である国産材利用に関し、かねてから木構造建材事業が手掛ける公共施設に使用するなど注力してまいりましたが、その活用は国を挙げての課題であることを踏まえ、木構造建材事業での更なる活用に加え、内装建材においても商品開発を進めるなど国産材事業の推進を図ってまいります。

集成材はその特性（強度、品質、加工の自由度）において、住宅のニーズにおける優位性を発揮出来る素材であることから、金物工法、フルプレカット加工など、独自の技術との融合を図ることで、集成材の需要を創造しシェア拡大を図ってまいります。

建材市場の価格競争が益々熾烈化するなか、資材コストの低減は最重要課題であり、海外展開をさらに拡大してまいります。特にベトナムを中心とする東南アジアにおいて生産拠点の展開を視野に入れた資材供給体制を構築し、コスト競争力強化に努めます。

木質系住宅建材市場における集成材の占有率は10%程度であり、集成材の優れた特性を活かした事業展開を具現化し、広く認知させていくことで、需要は増加する可能性が高いと思われます。当社は集成材業界のパイオニア企業として、住宅のトレンドを見据え、集成材の可能性をあらゆる角度から追求し、業界トップとしての位置付けを一層強固なものにする所存であります。

#### (3) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社は、ROE（株主資本利益率）を経営の重要指標として捉えております。その達成のためには、卓越した品質及び技術に裏打ちされた快適商品を安定的に市場に供給し、持続的成長を目指し、売上高営業利益率の向上にも努めてまいります。

また、キャッシュ・フローを重視した経営を展開していくとともに、資本コストの考え方を取り入れ、部門の使用資金に見合った付加価値、収益の実現を示す経営指標を導入し、事業効率を重視した経営を進めております。

#### (4) 経営環境及び事業上並びに財務上の対処すべき課題

今後の経済の見通しについては引き続き緩やかな回復基調にある一方、国内の政治情勢や東アジアに端を発する地政学リスクの高まりなど予断を許さない状況が続くものと予想されます。

住宅関連市場においては低金利を背景とし、2019年の消費増税を目前に堅調な市況が見込まれるものの、新設住宅着工戸数は漸減の傾向を辿ることが予測されております。

今後、新設住宅着工戸数減少の影響を受け、市場の競争激化が進んでいく流れのなか、非住宅分野への展開、国産材の活用、省施工技術の拡充といった新たな事業領域の開拓や新たなビジネスモデルの構築に迫られております。このような時勢への展開を図るため、当事業年度から「変化と連携」をスローガンに掲げ、組織の再編を通じ

た事業運営の変革と従業員の意識改革、そして「変化と連携」を具現化する施策を進めてきました。来期はこうした取り組みの深耕と拡充を推し進め「成果実現」を体現していくステージとして位置付け、以下の施策を講じてまいります。

内装建材事業においては、省施工化の時流を背景に省施工商品の拡充に向け、設備増強を図るとともに木構造建材事業本部との連携体制のもと企画提案営業を推進し販売ルートの拡充に努めます。また、施工性はもとよりデザイン性、多様な素材開発を含めた高付加価値製品の拡充等階段ラインアップの更なる充実化を図ってまいります。リフォーム市場の拡大が進むなか、引き続き好調な受注が見込まれるカウンターについては、塗装設備の拡充による増産体制を構築するとともにお客様のニーズを取り入れた新商品展開を進めてまいります。

木構造建材事業においては、非住宅分野への本格参入に向け、当事業年度に導入した大型汎用加工設備の稼働率を高めることに加え、建装事業の営業展開を拡充し非住宅特殊物件の受注拡大を図ります。プレカットについては主要顧客を主軸に安定受注の確保と新たな工法の展開とともに、内装建材事業との連携を強化し、当社独自のビジネスモデルの浸透を図り顧客層の拡大に努めてまいります。ツーバイフォーパネルについては、当事業年度から着手した軸組み用戸建てパネルなど新規事業の拡大及び新規顧客の受注獲得に努め、波が大きい受注形態の平準化と操業度の向上を図り、収益確保に向けた付加価値の追求を行ってまいります。

両事業部門ともオリンピック関連需要に向けた施策と2019年10月の消費増税の駆け込み需要に備えるとともに、個々のユーザーが要望するニーズにきめ細やかに対応し、増税後の反動減、逡減する需要環境に耐えうる施策への布石を講じてまいります。

## 2 【事業等のリスク】

文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

当社の事業展開その他に関するリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。また、必ずしも上記のようなリスク要因に該当しない事項についても、投資家の投資判断上、重要であると考えられる事項については、投資家に対する積極的な情報開示の観点から以下に開示しております。当社は、これらのリスク発生の可能性を認識したうえで、発生の回避及び発生した場合の対応に努めておりますが、本株式に関する投資判断は、本項及び本書中の本項以外の記載内容を併せて、慎重に検討したうえで行われる必要があります。なお、以下の記載は本株式への投資に関連するリスクを全て網羅するものではありませんので、この点ご留意下さい。

### (1) 住宅着工の動向が当社業績に影響を及ぼすことについて

当社は、集成材を中心とした住宅部材の製造販売及び関連する製品の販売のほか施設建築、賃貸及びこれに付帯する事業を行っております。なかでも新築住宅向けの製品を主たる事業領域としていることから、当社の業績は住宅着工戸数、特に木造住宅の着工戸数の動向に大きく左右される可能性があります。この数年間、新設住宅着工戸数は景気低迷の影響により激減するなど外部環境に左右されます。

市場における価格競争の激化は、売上ばかりでなく収益性に大きく影響を及ぼし、更に住宅様式の多様化、それに伴う顧客ニーズの変化が加速するなか、製品売上構成上に起因するリスクが業績に大きな影響を及ぼす可能性があります。

今後は、少子高齢化が進み将来的な人口動態の予測から住宅着工戸数が減少に向かうことが予測され、さらに廉価な海外製品の流入を含め、市場の構造変化に伴う価格競争の激化は売上、利益面に大きな影響を及ぼす可能性があります。

### (2) 特定販売先依存について

当社は、売上高の相当部分が限定された顧客に依存していることから、特定の顧客からの受注が大幅に減少した場合には、売上高及び利益に大きな影響を及ぼす可能性があります。

供給体制は、顧客の業績や経営方針の転換など自社に起因しない事象に左右される場合があり、予期しない契約の打ち切り、調達方針の変化などは業績に与える影響が大きいものと予測されます。また、これら顧客の要求に応じるための値下げの要請などは利益率を低下させる可能性があります。

### (3) 海外調達による資材の価格変動、為替変動等について

当社においては、資材調達における海外の依存度が高く、需給バランスや、自然環境の変化、原産国の政策、調達原材料の変化、また、為替の変動については、業績及び財務状況に大きな影響を及ぼす可能性があります。

#### (4) 法的規制について

当社は、集成材を中心とした住宅部材の製造販売を主な事業としております。製品及び各事業所を規制する主な法的規制は以下のとおりであります。これら法律の新たな規制の改正などは当社の事業運営に大きく影響を及ぼす可能性があります。

- ① 建築基準法
- ② 農林物資の規格化及び品質表示の適正化に関する法律（JAS法）
- ③ 製造物責任法（PL法）
- ④ 住宅の品質確保の促進等に関する法律（住宅品質確保促進法）
- ⑤ 労働基準法、労働安全衛生法及び関係諸法令
- ⑥ 下請代金支払遅延等防止法（下請法）
- ⑦ 消防法
- ⑧ 個人情報保護法
- ⑨ 環境関連法令（大気汚染防止法、水質汚濁防止法、騒音規制法、廃棄物の処理及び清掃に関する法律）

特に建築基準法は大幅な改正が行われた場合、製品の仕様、資材調達の変更など事業活動の根幹部分での対応が必要となり当社の事業内容に大きな影響を及ぼす可能性があります。また、近年、環境に関する認識の高まりを受け、諸規制が更に厳格化されることも予想され、これらの環境法令の改正に対応するため、新たな設備投資の導入が必要になるなど、これらに係る費用が当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (5) 製造物責任について

住宅業界においては、住宅品質確保促進法の施行など消費者保護の時勢を背景として、製造物の欠陥が業績に影響を及ぼす可能性があります。製品の品質に関しては、徹底した管理を実施いたしておりますが、木材は鉄やアルミニウムなどとは違い、有機物であるため、環境によっては、不具合が発生し結果として欠陥が生じる場合があります。特に柱や梁など住宅の構造部分に関わる部材の欠陥については、大きな責任問題に発展する可能性があります。この場合、発生する費用はもちろん、販売先の住宅メーカー、工務店など顧客からの信頼性を失墜させ、業績及び事業運営に大きく影響を及ぼす可能性があります。

#### (6) 人材の確保と育成について

企業価値の最大化、持続的発展が可能な会社の実現のためには、会社の基本理念に基づいた優秀な人材の確保と育成を図ることが重要課題であると捉えております。既存事業の維持、拡大、また、新製品開発や新規事業の構築を推進するにあたって、各セクションにおいて、それぞれに専門知識を有した人材の確保、また管理者の育成を図る必要があります。

雇用の流動化が進んでいるなか、新規採用のほか、即戦力のスペシャリストの中途採用を積極的に行うなど、人材の確保に努め、その育成にも力を注いでおりますが、生産拠点が岐阜県東部に集約されている雇用環境から、適格な人材を十分確保できない場合、又は優秀な人材が社外に流失した場合には、今後の事業運営に制限を受ける可能性があります、将来的な当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (7) 災害に対するリスクについて

当社の工場及び生産関連設備、構築物が火災、地震、水害等の災害の発生により、生産活動及び業務運営に支障をきたす可能性があります。主力工場は岐阜県東部に集中しており、立地的に河川の氾濫、土砂災害など自然災害の危険性が比較的高く、また、東海・東南海大地震の影響が懸念される地域であります。

火災に対する対策については、建物、設備を含め消防法に基づいた防火体制を整備し、従業員に対して避難訓練を行うなど罹災時における対策を徹底しております。

全ての建物、機械設備については火災、風水害など罹災時の補償を行う保険に加入しておりますが、地震保険については、十分な補償が得られないことから加入しておりません。

地震による工場、その他の構築物に対し滅失、焼失等が発生した場合にはこれらの物的損害はもちろん、復旧までの生産停止期間中の逸失利益は当社の事業運営や業績に大きな影響を及ぼす可能性があります。

### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 経営成績等の状況の概要

当事業年度における当社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

##### ① 財政状態及び経営成績の状況

当事業年度におけるわが国経済は、企業業績、雇用環境の改善を受けて緩やかな回復基調が続く一方、米国の政権の政治動向や東アジアにおける地政学リスクの高まりなど、世界情勢の影響もあり予断を許さない経済環境が続きました。

住宅関連業界においては、政策の後押しや低金利を背景に市況は比較的堅調に推移したものの、住宅着工数は前年同月比マイナスが続くなど持ち家を中心に減少傾向で推移いたしました。

こうしたなか、今後予測される需要縮小期に備え「選択と集中」及び、あらゆる局面において収益力向上に資する施策を講じ「変化」と「連携」をキーワードに新しい価値、顧客満足の創造に向けた事業運営の変革を促進するとともに、「真価」を発揮する事業構築に努めてまいりました。

内装建材事業につきましては、製造、営業、商品開発が一体となった新たな組織体制のもと、縦割りの機能・施策に横串を通す「連携」を重視した組織運営への転換と一体化を通じた営業力の増強に努め、自社製品ブランドの浸透を図ってまいりました。このような体制のもと、主力事業である階段においては省施工階段であるフルプレカット階段（エコプレ）やデザイン階段（ONE BEAM）の企画営業、増販に向けた施策を講じるとともに周辺部材の充実化及び既存製品のバージョンアップに取り組んできました。しかし、積層材からシート商品への需要変化の進展に伴い、主力商品の一つである積層階段の需要が低調に推移いたしました。シート商品の拡大の流れを受け、これら製品群の商品開発や拡販を進めると同時に、積層材の需要低下に歯止めをかけるべく、本物の木質素材が持つ特性・優位性と当社独自の塗装技術をアピールする施策を講じるなど、シート並びに木質素材の両輪を軸とする展開を図ってきました。事業部全体としてはカウンター及び玄関部材の増販、収益性の改善などが業績に寄与し、堅調な事業運営となりました。

木構造建材事業につきましては、総合プレカット事業の構築に向け事業基盤の強化、拡充を図っているなか、建築事業の受注拡大、販売ルートの開拓など非住宅分野への本格参入に向け、大型汎用加工設備を導入し稼働を開始いたしました。これにより大規模・中規模物件にかかる部材加工の内製化が可能となり、多種多様な部材加工の強みを活かした受注活動に努めるとともに外注費用の削減や工程の合理化を通じた収益力の向上を図ってきました。こうした施策も奏功し、売上高は堅調に推移した一方、海外資材の高騰の影響が顕著となるなか、製品価格への転嫁が困難な状況もあり収益面では目標に至らない結果となりました。ツーバイフォーパネル事業に関しては、受注の盛り上がりには欠けている状況が続いておりましたが、同事業は当社における成長戦略の一つとして位置付けており、新規取引先または新工法の立ち上げ等を強固に推し進めたことにより、徐々にこれらの事業が軌道に乗り始め、今後の展開に期待が持てる展開となりました。事業部全体では、前述したプレカット事業が事業部全体を牽引し増収となったものの、収益性では課題を残す内容となりました。

このような結果、当事業年度の売上高は140億90百万円と前事業年度と比較し、5億72百万円（4.2%）の増収となりました。利益面では、営業利益3億92百万円と前事業年度と比較し38百万円（11.0%）の増益、経常利益は3億72百万円と前事業年度と比較し45百万円（14.0%）の増益、当期純利益は、岐阜県より「平成28年度森林・林業対策事業補助金」にて取得した固定資産の圧縮記帳により、特別利益に補助金収入1億8百万円と特別損失に固定資産圧縮損1億7百万円を計上し、3億32百万円と前事業年度と比較し66百万円（24.9%）の増益となりました。

セグメントの業績を示すと、次のとおりであります。また、セグメント間取引については、相殺消去しております。

##### （内装建材事業）

売上高は、83億91百万円と前事業年度と比較し、3億42百万円（4.3%）の増収となりました。営業利益は、3億3百万円と前事業年度と比較し64百万円（27.2%）の増益となりました。

##### （木構造建材事業）

売上高は、56億79百万円と前事業年度と比較し、2億20百万円（4.0%）の増収となりました。営業利益は、76百万円と前事業年度と比較し32百万円（△29.5%）の減益となりました。

##### （その他）

売上高は、19百万円と前事業年度と比較し、8百万円（78.6%）の増収となりました。営業利益は、12百万円と前事業年度と比較し、6百万円（96.8%）の増益となりました。

② キャッシュ・フローの状況

当事業年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前事業年度末に比べ、21百万円減少し、7億18百万円となりました。

当事業年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

（営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は3億5百万円（前事業年度比60百万円の収入減少）となりました。これは主に売上債権の増加3億6百万円及びたな卸資産の増加1億20百万円等の使用した資金があったものの、税引前当期純利益3億73百万円、減価償却費2億85百万円及び仕入債務の増加1億94百万円等によるものであります。

（投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は1億38百万円（前事業年度比1億34百万円の支出減少）となりました。これは主に有形固定資産の取得による支出2億4百万円及び無形固定資産の取得による支出29百万円等があったものの、補助金の受取額による収入1億7百万円によるものであります。

（財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は1億88百万円（前事業年度比57百万円の支出増加）となりました。これは主に短期借入金の純増額1億円及び長期借入れによる収入4億円があったものの、長期借入金の返済による支出6億29百万円及び配当金の支払額44百万円等によるものであります。

③ 生産、受注及び販売の状況

a. 生産実績

当事業年度の実績をセグメントごとに示すと次のとおりであります。

セグメントの名称	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	前年同期比 (%)
内装建材事業 (百万円)	8,393	106.2
木構造建材事業 (百万円)	5,725	106.4
合計 (百万円)	14,118	106.2

(注) 1. セグメント間取引については、相殺処理しております。

2. 金額は販売価格によっております。

3. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

b. 商品仕入実績

当事業年度の商品仕入実績をセグメントごとに示すと次のとおりであります。

セグメントの名称	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	前年同期比 (%)
内装建材事業 (百万円)	29	119.3
木構造建材事業 (百万円)	—	—
合計 (百万円)	29	119.3

(注) 1. 金額は仕入価格によっております。

2. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

c. 受注状況

当事業年度の実績をセグメントごとに示すと次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高 (百万円)	前年同期比 (%)	受注残高 (百万円)	前年同期比 (%)
木構造建材事業	5,860	108.8	212	670.0
合計	5,860	108.8	212	670.0

(注) 1. セグメント間取引については、相殺処理しております。

2. 金額は販売価格によっております。

3. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

4. 当社の受注生産品は、主に木構造建材事業であり、他は概ね見込生産品であります。

d. 販売実績

当事業年度の販売実績をセグメントごとに示すと次のとおりであります。

セグメントの名称	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	前年同期比 (%)
内装建材事業 (百万円)	8,391	104.3
木構造建材事業 (百万円)	5,679	104.0
報告セグメント計 (百万円)	14,070	104.2
その他 (百万円)	19	178.6
合計 (百万円)	14,090	104.2

(注) 1. セグメント間取引については、相殺処理しております。

2. 最近2事業年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
	金額 (百万円)	割合 (%)	金額 (百万円)	割合 (%)
稲畑産業㈱	2,816	20.8	2,695	19.1

3. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において判断したものであります。

① 重要な会計方針及び見積り

当社の財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されており、財政状態及び経営成績に関する以下の分析が行われております。

当社は、財務諸表の作成に際し、決算日における資産・負債及び収益・費用の計上金額に影響を与える見積りを行っております。また、貸倒引当金、固定資産、株式等、繰延税金資産、退職給付、偶発事象及び訴訟等に関して見積り及び判断を実績や状況に応じ合理的な判断により継続的に検証し評価を行っております。しかしながら、これらの見積り及び判断は、不確実性を伴うため、実際の結果と異なる場合があります。

当社は、見積り及び判断により当社の財務諸表に重要な影響を及ぼすと考えている項目は以下のとおりであります。

a. 貸倒引当金

当社は、債権の回収不能見込額について、一般債権は貸倒実績率、貸倒懸念債権等特定の債権は個別に回収可能性を検討し、不足分については追加計上しております。

b. 固定資産の減損損失

当社は、「固定資産の減損に係る会計基準」を適用しており、グルーピングごとに営業活動から生じる損益が継続してマイナスである場合、市場価格が著しく下落した場合及び将来の使用が見込まれていない遊休資産等減損の兆候がある場合に減損損失の認識の判定を行い、投資額の回収が困難になった場合は、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減額分を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、回収可能価額については、正味売却価額又は使用価値により測定しており、合理的に算定された価額に基づき評価しております。

#### c. 株式の減損処理

当社の財務諸表において、長期保有を目的とする特定の取引先の株式を所有しております。これらの株式には、価格変動性が高い市場性のある株式と、市場性のない株式が含まれます。当社は投資価値の下落が一時的ではないと判断した場合、株式の減損処理をしております。公開会社の株式の場合、通常、時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合、2年間にわたり時価が取得原価に比べて30%以上50%未満継続して下落した場合、発行会社が債務超過の状態にある場合又は2期連続で損失を計上し翌期も損失が予想される場合において減損処理をしております。

非公開会社の株式の場合、発行会社の財政状態の悪化により実質価額が著しく低下した場合において減損処理をしております。

#### d. 繰延税金資産

当社の財務諸表において、繰延税金資産を計上した場合に回収可能性に関する会計上の判断は、財務諸表に重要な影響を及ぼします。繰延税金資産の計上を検討する際、将来の課税所得とタックス・プランニングを考慮し、回収可能な繰延税金資産を計上いたします。回収可能性については、実績及び将来に関するあらゆる入手可能な情報が考慮されます。

#### e. 退職給付

当社は、従業員の退職給付費用及び退職給付債務について、年金数理計算に使用される前提条件に基づいて算定しております。年金数理計算の前提条件には、割引率、退職率、死亡率、昇給率及び年金資産の期待運用収益率等の重要な見積りが含まれております。これらの前提条件の決定にあたっては、金利変動などの市場動向を含め、入手可能なあらゆる情報を総合的に判断し決定しております。

当社は、これらの前提条件の決定は合理的に行われたと判断しておりますが、前提条件と実際の結果が異なる場合には、将来の退職給付費用及び退職給付債務に影響を及ぼす可能性があります。

### ② 経営成績の分析

#### a. 概要

詳細につきましては、「第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (1)経営成績等の状況の概要」に記載のとおりであります。

#### b. 売上高

売上高は、内装建材事業において主に階段が減少したものの、框及びカウンターの上が増加し、83億91百万円と前事業年度と比較し3億42百万円増加いたしました。

また、木構造建材事業においては主に住宅パネル及び構造材が減少したものの、プレカット加工材及び施設建築等の売上が増加したことにより56億79百万円と前事業年度と比較し2億20百万円増加いたしました。

その他の賃貸事業においては19百万円と前事業年度と比較し8百万円増加いたしました。

その結果、140億90百万円と前事業年度と比較し5億72百万円の増収となりました。

#### c. 売上原価、販売費及び一般管理費

売上原価については、売上高の増加に伴い増加し、118億95百万円と前事業年度と比較し4億64百万円(4.1%)増加しました。売上原価率は収益力向上に資する施策を講じた結果0.2ポイント低下し84.4%となりました。

販売費及び一般管理費については、増収における人件費及び販売運賃の増加、主力商品の開発など試験研究費の増加等により、18億2百万円と前事業年度と比べ68百万円(4.0%)の増加となりました。

#### d. 営業利益、経常利益、税引前当期純利益

増収により、営業利益は、3億92百万円と前事業年度と比較し38百万円(11.0%)の増益、経常利益は、3億72百万円と前事業年度と比較し45百万円(14.0%)の増益となりました。

税引前当期純利益は、岐阜県より「平成28年度森林・林業対策事業補助金」にて取得した固定資産の圧縮記帳によって、特別利益に補助金収入1億8百万円と特別損失に固定資産圧縮損1億7百万円を計上し、3億73百万円と前事業年度と比較し87百万円(30.9%)の増益となりました。

#### e. 法人税、住民税及び事業税、当期純利益

法人税、住民税及び事業税については、前述に記載した要因によって課税所得が増加し、43百万円と前事業年度と比較し、8百万円(25.7%)の増加となりました。

法人税等調整額については、将来の課税所得を考慮した結果、△3百万円と前事業年度と比較し12百万円(80.7%)の増加となりました。

この結果、当期純利益は3億32百万円と前事業年度と比較し66百万円(24.9%)の増益となりました。

### ③ 財政状態の分析

当事業年度末における総資産は115億75百万円、純資産は61億26百万円、自己資本比率は52.9%となりました。

#### a. 資産

流動資産については、たな卸資産及び当事業年度末日が金融機関の休日であったため、売上債権が増加したことにより、67億60百万円と前事業年度末に比べ4億33百万円（6.9%）の増加となりました。

固定資産については、有形固定資産の減価償却等による減少があったものの、大型汎用加工設備等の固定資産の取得により、48億14百万円と前事業年度末に比べ7百万円（0.1%）の増加となりました。

#### b. 負債

流動負債については、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、仕入債務及び設備関係債務等が増加したことにより、40億22百万円と前事業年度末に比べ2億79百万円（7.5%）の増加となりました。

固定負債については、長期借入金を抑えたことにより、14億25百万円と前事業年度末に比べ1億26百万円（△8.1%）の減少となりました。

#### c. 純資産

純資産については、増収等によって当期純利益が増加したことにより61億26百万円と前事業年度末に比べ2億87百万円（4.9%）の増加となりました。

### ④ 流動性及び資金の源泉

#### a. キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フローは、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、売上債権が増加及び内装建材事業においてたな卸資産が増加したものの、増収等によって税引前当期純利益が増加、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、仕入債務が増加したことにより3億5百万円資金が得られました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、大型汎用加工設備の導入で補助金の受取額による収入があったものの、有形固定資産及び無形固定資産の取得による支出により1億38百万円を使用いたしました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、短期借入金及び長期借入れによる収入があったものの、長期借入金の返済による支出及び配当金の支払等により1億88百万円を使用いたしました。

これらの結果、現金及び現金同等物の期末残高は前事業年度末と比べ21百万円減少し7億18百万円となりました。

#### b. 財務政策

当社の資金調達、金融情勢の変化に対する対応と資金コスト削減及び調達構成のバランスを考慮し調達先の分散、調達方法及び手段等の多様化を図っております。

資金調達は、原則として、運転資金については、短期借入金で調達し、生産設備などの長期資金は、社債や長期借入金で調達することを原則としております。平成30年3月31日現在の短期借入金残高9億92百万円（1年内返済予定の長期借入金含む）及び長期借入金残高12億88百万円の借入金総額22億80百万円を主力銀行をはじめとする金融機関から調達しております。

## 4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

## 5 【研究開発活動】

当社は「品質方針」「環境方針」に基づいて、安心・安全な商品をお客様に提供することを重点テーマに掲げ、研究開発活動に努めております。

内装建材事業におきましては、安心・安全な商品作りとして「繰返し荷重試験機」を導入しました。省施工階段「エコプレ」では対象階段パターンを増やしより使いやすくシステム改善を行いました。そのなかで「1段目けこみ板挿入用の加工」は特許出願し他社との差別化を図りました。

「木の国山の国プロジェクト」では県産材圧密杉を使ったワンビームを地元家具メーカーとのコラボ商品として家具フェアに出展しました。圧密杉を単板貼りしたフリーボードはワンビームと同様に新たな商品として企画し、市場に製品を供給することが出来ました。

木構造建材事業におきましては、大型汎用加工設備を導入し、今後非住宅分野の木造化が加速するなか、加工対応力の強化に向けた新たな取り組みを進めております。

研究開発スタッフは15名で、当事業年度に支出した研究開発費の総額は1億24百万円となっております。



### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当社では、生産の集約化、合理化及び原価低減などに対応するため、木構造建材事業を中心に総額3億8百万円の設備投資を実施いたしました。

その主なものは、木構造建材事業の構造部材（プレカット）加工設備（合理化）、内装建材事業の内装部材（カウンター）加工設備（合理化）等であります。

（注）上記金額には、有形固定資産のほか、無形固定資産を含めております。

#### 2【主要な設備の状況】

当社における主要な設備は、次のとおりであります。

（平成30年3月31日現在）

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)	
			建物及び 構築物 (百万円)	機械装置及 び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース 資産 (百万円)	その他 (百万円)		合計 (百万円)
美濃加茂第1第2第3第4 工場 (岐阜県美濃加茂市)	内装建材事業 木構造建材事業	内装部材及 び構造部材 生産設備	459	376	1,569 (76,654)	25	35	2,466	219 [39]
資材物流センター (岐阜県美濃加茂市)	内装建材事業 木構造建材事業 その他 (賃貸事業)	物流倉庫	314	2	329 (22,455)	6	0	653	10 [-]
七宗第1第2第3工場 (岐阜県加茂郡七宗町)	内装建材事業	内装部材生 産設備	101	102	723 (31,490)	11	13	952	104 [24]
神淵工場 (岐阜県加茂郡七宗町)	内装建材事業 木構造建材事業	倉庫	54	0	38 (9,127)	4	0	98	4 [2]
白川工場 (岐阜県加茂郡白川町)	内装建材事業 木構造建材事業	倉庫	5	0	54 (6,013)	-	1	60	- [-]
本社 (岐阜県美濃加茂市)	管理業務	管理業務施 設	3	-	5 (254)	2	11	23	20 [5]
共同住宅 (名古屋市瑞穂区他1か所)	その他 (賃貸事業)	共同住宅	1	-	62 (446)	-	0	63	1 [-]

- （注）1. 帳簿価額には、建設仮勘定及びソフトウェア仮勘定の金額を含んでおりません。  
2. 帳簿価額のうち「その他」は工具、器具及び備品及びソフトウェア等であります。  
3. 従業員数の [ ] は、臨時従業員数を外書しております。  
4. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

### 3【設備の新設、除却等の計画】

当社の設備投資は、業界動向、投資効率等を総合的に勘案して策定しております。

当事業年度末における重要な設備の新設の計画は、次のとおりであります。

#### 重要な設備の新設

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達 方法	着手及び完了予定		完成後の 増加能力
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
七宗第1工場 (岐阜県加茂郡七宗町)	内装建材事業	造作材塗装設備	30	－	借入金	平成31.1	平成31.3	合理化
美濃加茂第1工場 (岐阜県美濃加茂市)	内装建材事業	階段加工設備	58	－	借入金	平成30.4	平成31.1	合理化
	内装建材事業	カウンター塗装設備	13	－	借入金	平成30.4	平成30.8	合理化
	内装建材事業	カウンター生産管理システム	20	－	借入金	平成30.3	平成30.7	合理化
美濃加茂第3工場 (岐阜県美濃加茂市)	木構造建材事業	工場環境改善	30	－	借入金	平成30.3	平成31.3	環境改善
本社 (岐阜県美濃加茂市)	管理業務	基幹会計システム更新	25	－	借入金	平成30.6	平成30.10	更新

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### ①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数 (株)
普通株式	3,982,100
計	3,982,100

(注) 平成29年6月29日開催の第58期定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。これにより、発行可能株式総数は35,838,900株減少し、3,982,100株となっております。

##### ②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数 (株) (平成30年6月28日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	1,557,750	1,557,750	東京証券取引所 (市場第二部) 名古屋証券取引所 (市場第二部)	単元株式数 100株
計	1,557,750	1,557,750	—	—

(注) 1. 平成29年6月29日開催の第58期定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。これにより、発行済株式総数は14,019,750株減少し、1,557,750株となっております。

2. 平成29年5月16日開催の取締役会決議により、平成29年10月1日付で単元株式数を1,000株から100株に変更しております。

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### ①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### ②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### ③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高 (百万円)
平成29年10月1日 (注)	△14,019,750	1,557,750	—	2,473	—	2,675

(注) 株式併合 (10 : 1) によるものであります。

## (5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）							単元未満株式の状況（株）	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	5	18	51	12	3	1,007	1,096	—
所有株式数（単元）	—	241	553	8,463	58	16	6,140	15,471	10,650
所有株式数の割合（%）	—	1.56	3.57	54.70	0.38	0.10	39.69	100	—

(注) 1. 自己株式68,727株は「個人その他」に687単元及び「単元未満株式の状況」に27株含めて記載しております。

なお、自己株式68,727株は株主名簿記載上の株式数であり、平成30年3月31日現在の実質的な所有株式数は68,627株であります。

2. 上記「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が、2単元含まれております。

3. 平成29年5月16日開催の取締役会決議に基づき、平成29年10月1日をもって1単元の株式数を1,000株から100株に変更しております。

## (6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（千株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
住友商事株式会社	東京都中央区晴海一丁目8番11号	304	20.44
都築木材株式会社	長野県伊那市日影336番地	236	15.87
西垣林業株式会社	奈良県桜井市戒重137番地	206	13.89
セブン工業社員持株会	岐阜県美濃加茂市牧野1006番地	44	2.98
内藤証券株式会社	大阪府大阪市中央区高麗橋一丁目5番9号	20	1.34
杉山 榮弘	岐阜県加茂郡白川町	19	1.33
佐藤 京子	東京都小金井市	13	0.87
株式会社レオパレス21	東京都中野区本町二丁目54番11号	10	0.73
安田 春男	岐阜県大垣市	10	0.67
原田 義久	愛知県碧南市	10	0.67
計	—	875	58.80

(注) 1. 上記のほか、当社が実質的に所有している自己株式が68千株あります。

2. 発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合は、小数点以下第3位を四捨五入しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 68,600	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 1,478,500	14,782	—
単元未満株式	普通株式 10,650	—	—
発行済株式総数	1,557,750	—	—
総株主の議決権	—	14,782	—

(注) 1. 「完全議決権株式 (自己株式等)」欄は、全て当社保有の自己株式であります。

2. 「完全議決権株式 (その他)」の株式数の欄には、証券保管振替機構名義の株式200株 (議決権の数2個) 及び株主名簿上は当社名義となっており、実質的に所有していない株式100株 (議決権の数1個) が含まれておりますが、議決権の数の欄には含まれておりません。

3. 平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。これにより、発行済株式総数は14,019,750株減少し、1,557,750株となっております。

② 【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数 (株)	他人名義所有株式数 (株)	所有株式数の合計 (株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合 (%)
セブン工業株式会社	岐阜県美濃加茂市 牧野1006番地	68,600	—	68,600	4.40
計	—	68,600	—	68,600	4.40

(注) 1. 上記のほか、株主名簿上は当社名義となっておりますが実質的に所有していない株式が100株 (議決権の数1個) あります。

なお、当該株式数は上記「①発行済株式」の「完全議決権株式 (その他)」の中に含まれております。

2. 平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得及び会社法第155条第9号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

## (2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
取締役会 (平成29年10月26日) での決議状況 (取得日 平成29年10月26日)	30	買取単価に買取対象の株式の終値を乗じた金額
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	30	72,746
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	—	—
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合 (%)	—	—

(注) 1. 平成29年10月1日付の株式併合により生じた1株に満たない端数の処理につき、会社法第235条第2項、第234条第4項及び第5項の規定に基づく自己株式の買取りを行ったものです。

2. 買取単価は、買取日の株式会社東京証券取引所における当社株式の終値であります。

## (3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	1,785	919,510
当期間における取得自己株式	11	18,337

(注) 1. 平成29年6月29日開催の第58期定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。当事業年度における取得自己株式1,785株の内訳は、株式併合前1,486株、株式併合後299株であります。

2. 当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

## (4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (株式併合による減少)	614,689	—	—	—
保有自己株式数	68,627	—	68,638	—

(注) 1. 平成29年6月29日開催の第58期定時株主総会決議により、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。

2. 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3 【配当政策】

当社の利益配分につきましては、株主の皆様に対する株主価値の向上を経営の重要課題として位置付け、安定成長を維持し、財務体質強化のための内部留保等を勘案のうえ、業績に基づいた適正な利益配分の継続を基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の配当につきましては、上記方針に基づき、普通配当21円に特別配当10円を加え、1株当たり31円（うち中間配当1円）の配当を実施することを決定しました。なお、平成29年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施しており、中間配当額1円は株式併合前の配当額、期末配当額30円は株式併合後の配当額であります。この結果、当事業年度の配当性向は17.9%となりました。

内部留保資金につきましては、今後予想される経営環境の変化に対応すべく、企業体質の一層の充実及び将来の事業展開に役立ててまいりたいと考えております。

当社は、「取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当（以下「中間配当金」という。）をすることができる。」旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成29年10月31日 取締役会決議	14	1
平成30年6月28日 定時株主総会決議	44	30

(注) 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。当事業年度の配当は、当該株式併合後の基準で換算すると、1株当たり中間配当額は10円、1株当たり期末配当額は30円となり、年間配当額は40円相当であります。

### 4 【株価の推移】

#### (1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第55期	第56期	第57期	第58期	第59期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	166	207	176	163	2,600 (272)
最低(円)	105	114	83	100	1,641 (139)

(注) 1. 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第二部におけるものであります。

2. 平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。第59期の株価については株式併合後の最高・最低株価を記載し、( )内に株式併合前の最高・最低株価を記載しております。

#### (2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高(円)	2,541	2,332	2,071	2,250	2,087	1,868
最低(円)	2,306	2,005	1,940	1,995	1,762	1,641

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第二部におけるものであります。

## 5 【役員 の 状 況】

男性 11名 女性 一名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
取締役会長		都築 寛明	昭和29年9月21日生	昭和53年4月 都築木材(株)入社 昭和60年4月 同社取締役 平成5年5月 同社代表取締役副社長 平成24年4月 同社代表取締役社長(現任) 平成28年6月 当社取締役会長就任(現任)	(注)4	—
代表取締役社長		田中 太郎	昭和41年6月4日生	平成2年4月 住友商事(株)入社 平成19年5月 同社生活資材本部木材資源事業部長付 平成24年1月 当社へ出向 顧問 平成24年4月 当社総務部長 平成24年6月 当社取締役管理本部長・総務部長 平成27年6月 当社取締役退任 住友商事(株)生活資材・不動産本部木材資源事業部長付 平成28年6月 当社代表取締役社長就任(現任) 営業本部長	(注)4	—
常務取締役	社長補佐	梅村 誠司	昭和31年2月6日生	昭和53年3月 当社入社 平成11年4月 当社技術部長 平成14年10月 当社商品企画開発部長 平成16年4月 当社化粧建材部長 平成20年4月 当社製造本部副本部長 積層建材部長 平成21年6月 当社取締役就任 平成22年6月 製造業務部長 平成22年11月 生産管理部長 平成23年1月 製造本部長 平成25年6月 常務取締役就任(現任) 平成28年12月 内装建材事業本部長 平成29年12月 社長補佐(現任)	(注)4	3
取締役	木構造建材事業本部長	横井 勝	昭和35年11月7日生	平成14年10月 当社入社 当社関西営業部長 平成17年1月 当社西日本営業部長 平成19年4月 当社プレカット部長 平成21年4月 当社製造本部副本部長 木構造建材部長 平成23年6月 当社取締役就任(現任) 平成28年12月 木構造建材事業本部長(現任) 平成29年12月 製造部長	(注)4	0
取締役	管理本部長	阿部 正義	昭和30年2月24日生	昭和55年7月 当社入社 平成8年4月 当社経理部長 平成14年4月 当社総務部長 平成16年4月 当社経理部長 平成25年6月 当社取締役就任(現任) 管理本部副本部長 平成25年10月 経営企画部長 平成27年6月 管理本部長(現任)	(注)4	4
取締役		高光 克典	昭和34年4月20日生	昭和57年4月 住友商事(株)入社 平成13年11月 Nichiha USA, Inc.へ出向 同社取締役社長 平成21年6月 三井住商建材(株)(現SMB建材(株))へ出向 同社代表取締役社長 平成25年7月 住友商事(株)生活資材本部木材資源事業部長 平成26年6月 当社取締役就任(現任) 平成27年4月 住友商事(株)生活資材・不動産本部長補佐(現任) 生活資材事業推進部長 平成28年4月 同社総合建設開発部長	(注)4	—



役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役		山北 耕介	昭和40年10月5日生	平成元年4月 住友商事㈱入社 平成16年4月 当社へ出向 顧問 平成16年6月 当社取締役管理統括・経営企画室管掌 平成17年1月 当社取締役業務管理担当・OEM営業部担当補佐・プレカット部長 平成18年6月 当社取締役退任 平成18年7月 住友商事㈱生活資材本部木材資源事業部部長付 平成27年4月 同社生活資材・不動産本部木材資源事業部長（現任） 平成27年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 4	—
取締役		西垣 貴文	昭和54年10月3日生	平成15年4月 住友電気工業㈱入社 平成20年9月 西垣林業㈱入社 平成22年3月 同社執行役員 平成23年3月 同社取締役 舞鶴事業所営業部担当兼部長 平成24年3月 同社取締役 総務部担当兼部長 平成26年3月 同社常務取締役 平成28年3月 同社代表取締役専務 中部地区統括・名古屋本社市売部担当（現任） 平成28年6月 当社取締役就任（現任）	(注) 4	—
監査役 (常勤)		近藤 辰彦	昭和27年4月12日生	昭和51年3月 当社入社 平成9年4月 当社総務部長 平成13年4月 当社品質保証部長 平成16年4月 当社総務部長 平成24年4月 当社内部監査室長 平成28年6月 当社監査役就任（現任）	(注) 5	0
監査役		串田 正克	昭和25年12月7日生	昭和61年4月 串田法律事務所開設（現任） 平成13年6月 当社監査役就任（現任）	(注) 5	—
監査役		稲越 千束	昭和24年6月15日生	昭和50年3月 監査法人伊東会計事務所（現有限責任 あずさ監査法人）入所 昭和55年9月 公認会計士登録 平成10年7月 同監査法人代表社員 平成23年7月 有限責任 あずさ監査法人退任 公認会計士稲越千束事務所開設（現任） 平成26年6月 当社監査役就任（現任）	(注) 6	—
計						10

- (注) 1. 取締役高光克典及び西垣貴文の両名は、社外取締役であります。  
2. 監査役串田正克及び稲越千束の両名は、社外監査役であります。  
3. 所有株式数は、表示単位未満を切り捨てて表示しております。  
4. 平成29年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から2年間  
5. 平成28年6月24日開催の定時株主総会の終結の時から4年間  
6. 平成30年6月28日開催の定時株主総会の終結の時から4年間

7. 当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役2名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
後藤 保明	昭和24年9月13日生	昭和52年11月 当社入社 平成4年12月 当社取締役総務部長 平成8年10月 当社取締役生産管理部長 平成11年4月 当社取締役構造建材部長 平成14年7月 当社取締役和室建材部長 平成16年6月 当社参与 平成20年6月 当社内部監査室長 平成24年4月 当社内部監査室参与（現任）	1
野口 洋高	昭和50年5月12日生	平成19年9月 弁護士登録 窪田法律特許事務所入所 平成20年1月 ホーガン・ロヴェルズ法律事務所外国法共同事業 平成27年6月 串田法律事務所入所（現任）	—

## 6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

#### ① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社におけるコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、社是に掲げた、公正、透明性を基本姿勢とした企業倫理に基づき、経営の意思決定の迅速化と内部統制の向上を図ることで、企業価値の維持増大を目指すことであります。更に企業統治システムを展開するため、法令、社会規範の遵守を核とし、企業理念、経営方針など経営に関するあらゆるビジョンを共有化させ、これを体系的に取り込み、強化することで、経営の適法性を最重視したコーポレート・ガバナンス体制を構築してまいります。

#### ② 企業統治の体制

##### イ. 企業統治の体制の概要及び当該企業統治の体制を採用する理由

当社は監査役制度を採用しております。

当社の経営機構として、取締役会、監査役会、経営会議を毎月開催しております。取締役会は取締役8名（うち社外取締役2名）及び監査役3名（うち社外監査役2名）で構成しており、経営の意思決定を諮る最重要機関として常に内部牽制の徹底を図っております。社外取締役による独立的見地からの意見を取り入れ、適法かつ公正に経営が行われているか多角的に情報を共有するとともに、活発な議論を交わし相互牽制を促すことで取締役会の活性化と公正化を図っております。また、緊急を要する案件が発生した場合は、臨時取締役会を開催するなど機動的な運用を行っております。取締役の担当及び職務などに関しても、こうした運用のもと決定しております。

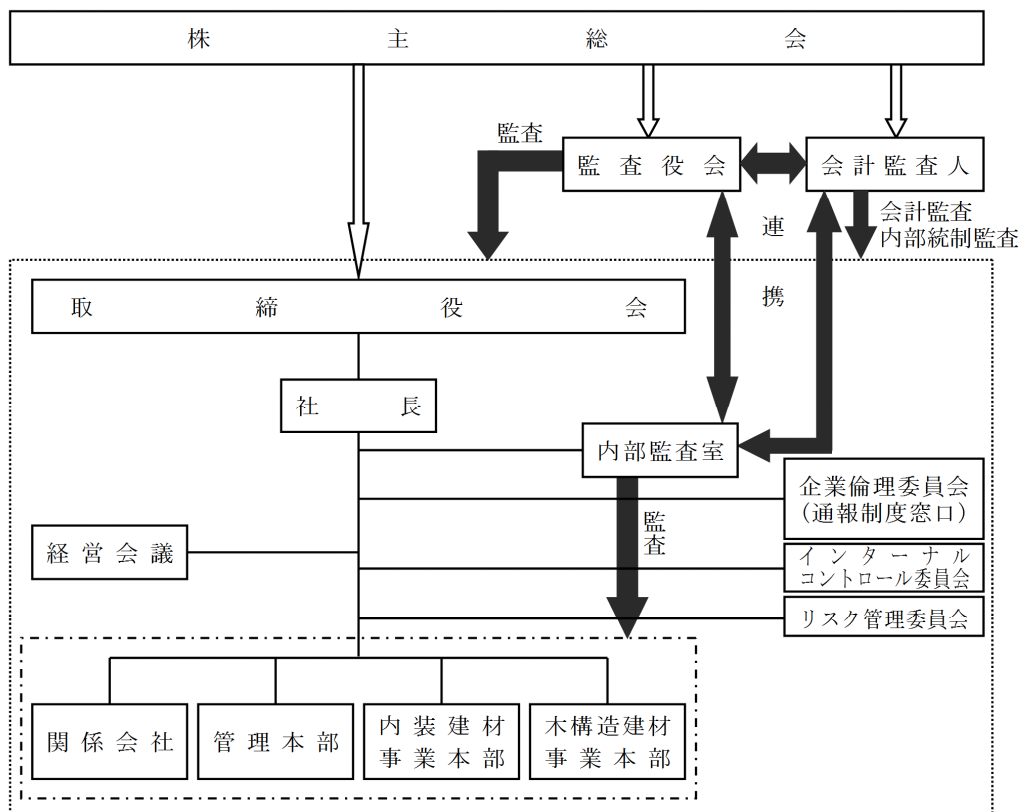
監査役会は、監査役2名が社外監査役であり、個々の監査役の独立性を保持しながら経営監視機能の強化を図っております。監査役は取締役会など重要会議に出席し、業務執行の意思決定及びその執行状況について監査を行っております。更に、実効性を高めるうえで、会計監査人及び内部監査室と緊密に連携を図り、監査機構全体の相互連携を強化しております。

経営会議は、月2回開催しており、経営方針・目標に対する執行状況及び進捗管理など重要事項の運営を円滑に進めるための審議、協議を行っております。

内部監査室（3名）は会社の業務及び財産の状況を監査し、社長に対し報告を行っております。また、内部統制のモニタリング機能としてその体制強化を図っております。

内部統制システムを推進する委員会として、企業倫理委員会、インターナルコントロール委員会、リスク管理委員会を組織しております。各委員会はそれぞれ、コンプライアンス徹底、内部統制推進・業務品質向上、リスク管理といったガバナンス体制の強化を図る活動を行っております。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の模式図は次のとおりであります。



ロ. 内部統制システムの整備の状況

当社の内部統制システムに関する基本的な考え方及びその整備状況は以下のとおりです。

- I 取締役並びに使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他業務の適正を確保するための体制
  - i 社是「真実と努力」、「行持報恩」を基本理念とし、社是に基づく真実性、公正・透明性を基本とした「行動規範」、「行動指針」を定め、役職員全員がこれを遵守すべく継続的な研修を行う。
  - ii 企業倫理委員会を組織し、取締役がその委員長を務め、法令・社会規範遵守の啓蒙活動のほか、同委員会及び弁護士を相談窓口とする社内通報制度の利用を促進し、コンプライアンス違反、その他の問題に関する事実の早期発見に努めるとともに不正行為の原因追及と再発防止策の策定を行うなど法令遵守の徹底化を図る。
  - iii インターナルコントロール委員会を組織し、各部が行う業務管理の点検及び改善事項の抽出に基づき、改善策の検証、実施に関する支援を行い業務品質の向上を図る。
  - iv 金融商品取引法に基づく内部統制報告制度への対応を企業基盤強化のインフラ整備の一環として位置付け、組織の業務全体に係る内部統制の有効かつ効率的な整備・運用及び評価を行う。
  - v 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体とは断固として対決し、一切の関係を遮断するとともに、これらの活動を助長するような行為は行わない。事案については管理部を対応部署として定めるとともに、これら勢力、団体からの介入を防止するため警察当局、暴力追放推進センター、弁護士等との緊密な連携を確保する。
  
- II 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
  - i 情報管理、文書管理に関する規程に基づき、各種の文書、帳票類等について適切に保存、管理する。また、株主総会をはじめ重要会議の議事録、事業運営上の重要事項に関する決裁書類など取締役の職務の執行に必要な文書については、取締役及び監査役が常時閲覧することができる管理体制を維持する。
  - ii 機密情報、内部情報については、内部情報管理に関する規程に定めた基準に基づき適切に管理する。
  
- III 損失の危険の管理に関する規程その他の体制
  - i リスク管理委員会を組織し、総合的なリスク管理の方針と手法を明文化し、重大なリスクの発現に備え、社員のとるべき行動を定め周知する。
  - ii 各部署は、リスク管理規程に基づきそれぞれの所管業務に係るマニュアル、作業手順書などを整備し実施する。
  - iii 安全衛生管理に関するマニュアルを整備し、定期的に社員教育等を行う。
  
- IV 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
  - i 取締役の人数は、取締役会において十分な議論を尽くし、迅速かつ合理的な意思決定を行うことができる範囲とする。
  - ii 取締役会のほか経営会議を原則月2回開催し、重要案件の討議と業務に関する報告を行う。
  - iii 取締役会への付議については取締役会規則に基づき行う。
  
- V 当社並びに子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
  - i 内部統制に関する規程の整備を行うとともに業務の適正化と効率化を推進する。
  - ii 当社の経営理念、行動指針を子会社の全役職員が共有し、順法意識の醸成を図る。
  - iii 関係会社管理規程を整備し、子会社の適切な管理を行うとともに子会社における内部統制を推進し業務の効率性及び適正性を確保する施策を講ずる。
  - iv 子会社の役員等に対し定期的なモニタリングを実施し必要な助言、支援を行う。
  
- VI 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項  
監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合、必要な人員を配置する。
  
- VII 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項  
監査役を補助する使用人を置いた場合には、当該使用人の任命、解任、人事評価、人事異動等については監査役会の同意を得たうえで決定することとし、取締役からの独立性を確保する。

#### VIII 監査役の使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合には、必要な知識、能力を有した使用人を選任し、監査役の指揮命令のもとに従事する組織、体制に帰属する。

#### IX 取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

- i 取締役会その他の重要な会議への出席を監査役に要請する。
- ii 取締役及び使用人は当社又は子会社における業務又は財務に重大な影響を及ぼす事項について、遅滞なく監査役に報告する。
- iii 監査役は何時でも必要に応じて取締役及び使用人に報告を求めることができる。また、必要な文書については、常時閲覧することができる。

#### X 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

内部通報制度の運用に準じ、報告者に不利益がないことを保証する。

#### X I 監査役職務の執行について生じる費用の前払い又は償還の手続きその他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項

監査役が職務の執行に対して費用の前払請求又はその他の当該職務の執行について生ずる費用の請求があった場合は、当該請求に係る費用又は債務が当該監査役職務の執行に必要でないことを証明した場合を除き、いかなる場合も請求に応ずる。

#### X II その他監査役職務の執行が実効的に行われることを確保するための体制

- i 取締役社長は定期的に監査役と情報交換を行うとともに、取締役及び使用人は定期的な監査役のヒアリングを通じ、職務執行状況を監査役に報告する。
- ii 内部監査室は、内部監査の計画及び結果について定期的に情報交換を行うなど、効率的な監査役監査に資するよう、監査役と緊密な連携を図る。
- iii 監査役は、会計監査人との定期的な打ち合わせを通じて、会計監査人の監査活動の把握と情報交換を図るとともに、会計監査人の監査講習会への出席、在庫等たな卸資産監査への立会い等を行い、監査役の監査活動の効率化と質的向上を図る。
- iv 監査役はその職務を適切に遂行するために、関係会社の監査役等との情報連絡会を行うなど、関係会社の監査役等との意思疎通及び情報の交換を図る。

#### ハ、リスク管理体制の整備の状況

内部統制システムの基本方針に基づき、リスク管理委員会を設置し、総合的なリスク管理の方針と手法を明文化し、重大なリスクの発現に備え、社員のとるべき行動を周知するとともに各部署の問題点の認識及び改善策の策定をサポートしております。

各部署においては、リスク管理規程及びリスク管理委員会の指導に基づき、それぞれの所管業務に係るマニュアル・作業手順書などを整備し、リスク管理プロセス（Plan・Do・Check・Action）の構築に努めリスクの極小化を図っております。

#### ③ 内部監査及び監査役監査の状況

当社の内部監査の組織として、社長直轄の内部監査室（人員3名）を設置しております。内部監査室は定期的に各部門における業務及び財産の状況を監査するとともに、必要に応じて関係者への聴取及び調査を行い、その内容は社長に対し報告を行っております。また、内部統制のモニタリング機能として、全社又は各部門における業務の適正性や効率性の評価及び監査を行っております。

監査役会は、監査役3名のうち2名を社外監査役で構成しております。監査役は取締役会など重要会議に出席するとともに、代表取締役との定期的な会合を通じて意見交換を行っております。また、業務執行に関する重要書類の閲覧を行うほか、必要に応じて取締役等から業務の報告を受けることにより業務執行に関する監査を行っております。

監査役と内部監査室との連携については、内部監査室が行う監査の結果や内部統制の評価の状況等について定期的に報告を受け、相互に情報交換を行うなど常に連携を図っております。

監査役と会計監査人との連携については、会計監査人の監査計画に基づき実施される監査業務に関する定期的な打合せを通じて、会計監査人の監査活動の把握と情報交換を図るとともに、会計監査人が行う監査講習会への出席、在庫たな卸等資産監査への立会いに同行するなど、緊密な連携による監査の効率化と質的向上を図っております。

④ 会計監査の状況

会計監査については、会計監査人として有限責任 あずさ監査法人を選任しており、当社の会計監査業務を執行した公認会計士は松本千佳（監査年数2年）及び馬淵宣考（監査年数1年）の2名であります。なお、当社の会計監査業務における補助者は公認会計士7名、日本公認会計士協会準会員8名及びその他7名であります。

⑤ 社外取締役及び社外監査役

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役高光克典は住友商事株式会社の業務執行者であります。同社は当社議決権の20.6%を所有するその他の関係会社であり、同社は資材調達における取引先の1社であります。現在の取引状況から、一般株主と利益相反が生じるおそれがないものと判断しており、上場金融商品取引所の定める独立役員に指定しております。

社外取締役西垣貴文は西垣林業株式会社の代表取締役専務であります。同社は当社の議決権の14.0%を所有する主要株主であります。直接的な取引高は僅少であり、一般株主と利益相反が生じるおそれがないものと判断しており、上場金融商品取引所の定める独立役員に指定しております。

社外監査役串田正克は弁護士（串田法律事務所代表）であり、その中立的な立場から、上場金融商品取引所の定める独立役員の要件を充たしており、一般株主と利益相反が生じるおそれがないため独立役員に指定しております。

社外監査役稲越千束は公認会計士（公認会計士稲越千束事務所代表）であり、財務、会計に相当の知見を有し、その見地から経営全般に的確な提言が可能であるため社外監査役として選任しております。

社外取締役2名及び社外監査役2名と当社の間には、いずれも人的関係、資本的関係又は取引関係その他利害関係はありません。

社外取締役又は社外監査役の選任について、当社からの独立性に関する特段の基準を設けておりませんが、社外取締役については、経営全般の監督機能が発揮できる立場にあり、そのための必要な見識、経験を有していること、社外監査役については、高い専門性、多角的な視点からあるいは中立的見地から監査が行える豊富な経験や幅広い知見を有していることを選任の基本方針としております。

社外取締役は、それぞれ経営全般に対する幅広い視点からの的確な提言を行っており、選任状況は適切であると考えております。社外監査役は、1名は上場金融商品取引所の定める独立役員の要件を満たすなど高い独立性を有するほか、専門性、中立的視点から取締役の業務執行の適法性や取締役会の意思決定の適正性を確保するための役割を果たしており選任状況は適切であるとと考えております。

社外取締役及び社外監査役は、必要に応じミーティングを行うなど、緊密に相互連携を図っております。

⑥ 責任限定契約の内容の概要

当社と取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）及び監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しており、その概要は次のとおりです。

イ. 取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）の責任限定契約

取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）は本契約締結後、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき、善意でかつ重大な過失がないときは同法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として損害賠償責任を負担する。

ロ. 監査役の責任限定契約

監査役は本契約締結後、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき、善意でかつ重大な過失がないときは同法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として損害賠償責任を負担する。

⑦ 役員報酬等

イ. 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役（社外取締役を除く。）	66	66	—	—	—	6
監査役（社外監査役を除く。）	10	10	—	—	—	1
社外役員	13	13	—	—	—	4

（注）上記の報酬等の総額及び基本報酬には、当事業年度中の役員退職慰労引当金繰入額として費用処理した10百万円（取締役8百万円、監査役1百万円及び社外役員1百万円）を含んでおります。

ロ. 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの  
該当事項はありません。

ハ. 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

取締役の報酬は、株主総会で定められた取締役の報酬限度額の範囲内で、役位、会社業績等総合的に勘案して、取締役会決議により決定しております。監査役の報酬については、株主総会で定められた監査役の報酬限度額の範囲内で、役割等を勘案して、監査役の協議により決定しております。なお、役員退職慰労金については「役員退職慰労金支給規程」において、金額又は算定方法等を定めております。

⑧ 株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

銘柄数 1 銘柄  
貸借対照表計上額の合計額 6百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
大東建託(株) (協力会持株会)	293	4	主要販売先であり、円滑な取引関係を維持するため

みなし保有株式

該当事項はありません。

当事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
大東建託(株) (協力会持株会)	332	6	主要販売先であり、円滑な取引関係を維持するため

みなし保有株式

該当事項はありません。

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額  
該当事項はありません。

ニ. 投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの銘柄、株式数、貸借対照表計上額  
該当事項はありません。

ホ. 投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの銘柄、株式数、貸借対照表計上額  
該当事項はありません。

⑨ 取締役の定数

当社の取締役は12名以内とする旨定款に定めております。

⑩ 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨も定款で定めております。

⑪ 自己株式の取得の決定機関

当社は、自己株式の取得について、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって自己株式を取得することができる旨定款に定めております。これは、機動的に自己株式の取得を行うことを目的とするものであります。

⑫ 取締役及び監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議によって、同法第423条第1項に規定する取締役及び監査役（取締役及び監査役であった者を含む。）の賠償責任を法令が定める限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役及び監査役がその期待される役割を十分に発揮できるようにすることを目的とするものであります。

⑬ 剰余金の配当等の決定機関

当社は、剰余金の配当（中間配当金）について、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当（中間配当金）をすることができる旨定款で定めております。これは、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

⑭ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

前事業年度		当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
24	—	24	—

② 【その他重要な報酬の内容】

(前事業年度)

該当事項はありません。

(当事業年度)

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前事業年度)

該当事項はありません。

(当事業年度)

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はありませんが、当社の事業規模、特性、監査日数等を勘案したうえで決定しております。



## 第5【経理の状況】

### 1. 財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）に基づいて作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による監査を受けております。

### 3. 連結財務諸表について

「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）第5条第2項により、当社では、子会社の資産、売上高、損益、利益剰余金及びキャッシュ・フローその他の項目から見て、当企業集団の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に関する合理的な判断を誤らせない程度に重要性が乏しいものとして、連結財務諸表は作成しておりません。

なお、資産基準、売上高基準、利益基準及び利益剰余金基準による割合は次のとおりであります。

資産基準	0.87%
売上高基準	0.02%
利益基準	△0.22%
利益剰余金基準	△0.94%

### 4. 財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、対応ができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しており、主に管理部において、研修会等への参加をしております。

1 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	740	718
受取手形	1,069	※2 544
電子記録債権	421	※2 1,376
売掛金	2,658	2,536
商品及び製品	230	246
仕掛品	300	347
原材料及び貯蔵品	695	753
繰延税金資産	90	116
未収入金	100	99
その他	25	27
貸倒引当金	△5	△5
流動資産合計	6,326	6,760
固定資産		
有形固定資産		
建物（純額）	945	906
構築物（純額）	65	59
機械及び装置（純額）	444	※4 480
車両運搬具（純額）	4	2
工具、器具及び備品（純額）	11	8
土地	2,876	2,876
リース資産（純額）	37	50
建設仮勘定	69	—
山林	11	11
有形固定資産合計	※1 4,466	※1 4,396
無形固定資産		
ソフトウェア	74	※4 90
その他	50	17
無形固定資産合計	125	108
投資その他の資産		
投資有価証券	4	6
関係会社株式	47	47
出資金	0	0
破産更生債権等	0	0
長期前払費用	2	3
前払年金費用	90	170
差入保証金	21	21
会員権	3	3
保険積立金	44	56
投資その他の資産合計	215	309
固定資産合計	4,807	4,814
資産合計	11,134	11,575

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	668	※2 722
電子記録債務	706	※2 795
買掛金	830	881
短期借入金	350	450
1年内返済予定の長期借入金	599	542
リース債務	10	14
未払金	162	173
未払費用	101	124
未払法人税等	49	46
前受金	0	15
預り金	32	59
賞与引当金	135	143
設備関係支払手形	1	※2 29
設備関係未払金	4	23
その他	92	0
流動負債合計	3,743	4,022
固定負債		
長期借入金	1,460	1,288
リース債務	30	40
繰延税金負債	17	40
役員退職慰労引当金	33	44
資産除去債務	2	2
その他	7	9
固定負債合計	1,552	1,425
負債合計	5,295	5,448
純資産の部		
株主資本		
資本金	2,473	2,473
資本剰余金		
資本準備金	2,675	2,675
資本剰余金合計	2,675	2,675
利益剰余金		
その他利益剰余金		
圧縮記帳積立金	3	3
繰越利益剰余金	927	1,215
利益剰余金合計	930	1,218
自己株式	△241	△242
株主資本合計	5,837	6,124
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	0	1
評価・換算差額等合計	0	1
純資産合計	5,838	6,126
負債純資産合計	11,134	11,575

## ②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高		
製品売上高	13,479	14,036
商品売上高	28	33
その他の売上高	10	19
売上高合計	13,518	14,090
売上原価		
製品売上原価		
製品期首たな卸高	324	230
当期製品製造原価	※2 11,309	※2 11,876
合計	11,634	12,107
製品期末たな卸高	230	246
製品売上原価	※1 11,403	※1 11,861
商品売上原価		
商品期首たな卸高	—	—
当期商品仕入高	24	29
合計	24	29
商品期末たな卸高	—	—
商品売上原価	24	29
その他の原価	2	5
売上原価合計	11,430	11,895
売上総利益	2,087	2,195
販売費及び一般管理費		
販売運賃	778	805
広告宣伝費	10	9
販売促進費	9	11
役員報酬	71	79
給料及び手当	323	326
賞与	24	28
賞与引当金繰入額	28	30
退職給付費用	8	6
役員退職慰労引当金繰入額	8	10
法定福利費	65	68
旅費及び交通費	32	29
租税公課	37	40
減価償却費	8	8
賃借料	30	29
研究開発費	※2 95	※2 114
支払手数料	63	64
その他	135	139
販売費及び一般管理費合計	1,733	1,802
営業利益	354	392

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	0	0
受取手数料	3	2
その他の雇用関連収入	0	0
スクラップ売却益	1	0
資材売却益	1	1
保険差益	0	1
補助金収入	0	—
その他	0	0
営業外収益合計	8	7
営業外費用		
支払利息	22	17
売上割引	11	10
手形売却損	0	0
その他	2	0
営業外費用合計	35	27
経常利益	326	372
特別利益		
固定資産売却益	※3 0	※3 0
補助金収入	—	108
特別利益合計	0	109
特別損失		
固定資産廃棄売却損	—	※4 1
固定資産圧縮損	—	※5 107
会員権売却損	1	—
保険解約損	4	—
P C B 処理費用	1	—
減損損失	※6 34	—
特別損失合計	42	108
税引前当期純利益	285	373
法人税、住民税及び事業税	34	43
法人税等調整額	△15	△3
法人税等合計	18	40
当期純利益	266	332

【製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)			当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)		
		金額 (百万円)		構成比 (%)	金額 (百万円)		構成比 (%)
I 材料費			7,468	66.5		7,948	66.7
II 労務費			2,006	17.8		2,051	17.2
III 経費							
1. 減価償却費		279			272		
2. 外注加工費		833			989		
3. その他		651	1,763	15.7	662	1,924	16.1
当期総製造費用			11,238	100.0		11,923	100.0
仕掛品期首たな卸高			371			300	
合計			11,609			12,223	
仕掛品期末たな卸高			300			347	
当期製品製造原価			11,309			11,876	

(注)

項目	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
原価計算の方法	<p>予定原価に基づく工程別製品別総合原価計算を実施しております。 ただし、構造部材については実際原価に基づく個別原価計算を実施しております。</p>

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本					利益剰余金合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金		
				圧縮記帳積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	2,473	2,675	2,675	3	705	708
当期変動額						
剰余金の配当					△44	△44
圧縮記帳積立金の取崩				△0	0	－
当期純利益					266	266
自己株式の取得						
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	－	－	－	△0	221	221
当期末残高	2,473	2,675	2,675	3	927	930

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計	
当期首残高	△241	5,616	0	0	5,617
当期変動額					
剰余金の配当		△44			△44
圧縮記帳積立金の取崩		－			－
当期純利益		266			266
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△0	△0	△0
当期変動額合計	△0	221	△0	△0	221
当期末残高	△241	5,837	0	0	5,838

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金		利益剰余金合計
				圧縮記帳積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	2,473	2,675	2,675	3	927	930
当期変動額						
剰余金の配当					△44	△44
圧縮記帳積立金の取崩				△0	0	－
当期純利益					332	332
自己株式の取得						
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	－	－	－	△0	288	288
当期末残高	2,473	2,675	2,675	3	1,215	1,218

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計	
当期首残高	△241	5,837	0	0	5,838
当期変動額					
剰余金の配当		△44			△44
圧縮記帳積立金の取崩		－			－
当期純利益		332			332
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			0	0	0
当期変動額合計	△0	287	0	0	287
当期末残高	△242	6,124	1	1	6,126



## ④【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益	285	373
減価償却費	289	285
減損損失	34	—
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	△1	0
賞与引当金の増減額 (△は減少)	55	8
前払年金費用の増減額 (△は増加)	△65	△80
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△19	10
受取利息及び受取配当金	△0	△0
支払利息	22	17
補助金収入	—	△108
固定資産除売却損益 (△は益)	△0	0
固定資産圧縮損	—	107
会員権売却損益 (△は益)	1	—
保険解約損益 (△は益)	4	—
売上債権の増減額 (△は増加)	△272	△306
たな卸資産の増減額 (△は増加)	276	△120
仕入債務の増減額 (△は減少)	△259	194
その他	65	△14
小計	415	366
利息及び配当金の受取額	0	0
利息の支払額	△22	△17
法人税等の支払額	△27	△44
営業活動によるキャッシュ・フロー	365	305
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△292	△204
無形固定資産の取得による支出	△37	△29
投資有価証券の取得による支出	△0	△0
関係会社株式の取得による支出	△12	—
会員権の売却による収入	2	—
会員権預託金の返還による収入	56	—
保険積立金の解約による収入	17	—
補助金の受取額	—	107
その他	△5	△9
投資活動によるキャッシュ・フロー	△272	△138
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	—	100
長期借入れによる収入	600	400
長期借入金の返済による支出	△676	△629
自己株式の取得による支出	△0	△0
リース債務の返済による支出	△9	△13
配当金の支払額	△44	△44
財務活動によるキャッシュ・フロー	△130	△188
現金及び現金同等物に係る換算差額	△0	△0
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△37	△21
現金及び現金同等物の期首残高	777	740
現金及び現金同等物の期末残高	※ 740	※ 718

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 製品・仕掛品

総平均法による原価法（ただし、構造部材については個別法による原価法）

（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切り下げの方法）

(2) 原材料

総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切り下げの方法）

(3) 貯蔵品

最終仕入原価法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切り下げの方法）

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

建物（建物附属設備を除く）

定額法

建物以外

定率法

ただし、平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 7年～41年

機械及び装置 8年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法

なお、ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れの損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、賞与の支給規程による支給対象期間に対応する支給見込額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

なお、当事業年度末では、年金資産の合計額が退職給付債務から未認識数理計算上の差異を控除した金額を超過しているため、当該超過額を前払年金費用（投資その他の資産）に計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

② 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（5年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

(4) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

5. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

6. キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、隨時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」（IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606）を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(貸借対照表関係)

※1 有形固定資産の減価償却累計額

前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
6,356百万円	6,568百万円

※2 期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務

期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務の会計処理については、手形交換日等をもって決済処理をしております。

なお、当事業年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形、電子記録債権及び電子記録債務が、事業年度末残高に含まれております。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
受取手形	一百万円	72百万円
電子記録債権	—	231
支払手形	—	115
電子記録債務	—	65
設備関係支払手形	—	6

3 当座借越契約

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行4行と当座借越契約を締結しております。これらの契約に基づく事業年度末の借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
当座借越極度額	2,400百万円	2,400百万円
借入実行残高	350	450
差引額	2,050	1,950

※4 圧縮記帳

当事業年度において、国庫補助金等の受入れにより、機械及び装置について100百万円及びソフトウェアについて6百万円の圧縮記帳を行いました。

なお、有形固定資産及び無形固定資産に係る国庫補助金等の受入れによる圧縮記帳累計額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
機械及び装置	一百万円	100百万円
ソフトウェア	—	6
計	—	107

(損益計算書関係)

※1 たな卸資産

期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切り下げ後の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	19百万円	17百万円

※2 研究開発費の総額

一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	106百万円	124百万円

※3 固定資産売却益の内訳

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
車両運搬具	0百万円	0百万円
その他	0	—
計	0	0

※4 固定資産廃棄売却損の内訳

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
廃棄損		
建物	—百万円	0百万円
機械及び装置	—	0
工具、器具及び備品	—	0
その他	—	0
計	—	1
廃棄売却損合計	—	1

※5 固定資産圧縮損の内訳

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
圧縮損		
機械及び装置	—百万円	100百万円
ソフトウェア	—	6
計	—	107

※6 減損損失

当社は以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

場所	用途	種類
岐阜県加茂郡白川町	遊休資産	建物・土地等
岐阜県美濃加茂市	生産管理システム	その他の無形固定資産 (ソフトウェア仮勘定)

当社は、事業部門別を基本としてグルーピングしており、賃貸及び将来の使用が見込まれていない遊休資産については、個々の物件単位でグルーピングをしております。

事業の用に供していない遊休資産については、帳簿価額を回収可能価額まで減額し減損損失22百万円として特別損失に計上しております。その内訳は建物11百万円、構築物0百万円、工具、器具及び備品0百万円、土地11百万円であります。

生産管理システムについては、事業の用に供する具体的な計画が立たなくなったことから、回収可能性を考慮し減損損失11百万円として特別損失に計上しております。その内訳は全額その他の無形固定資産（ソフトウェア仮勘定）であります。

なお、当資産グループの回収可能価額は正味売却価額または使用価値により測定しており、建物及び土地については不動産鑑定評価額により評価、その他の無形固定資産については、将来キャッシュ・フローが見込めないため備忘価額により評価しております。

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(千株)	当事業年度増加株式数(千株)	当事業年度減少株式数(千株)	当事業年度末株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	15,577	—	—	15,577
合計	15,577	—	—	15,577
自己株式				
普通株式(注)	678	3	—	681
合計	678	3	—	681

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	29	2	平成28年3月31日	平成28年6月27日
平成28年10月31日 取締役会	普通株式	14	1	平成28年9月30日	平成28年12月1日

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	29	利益剰余金	2	平成29年3月31日	平成29年6月30日

当事業年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(千株)	当事業年度増加株式数(千株)	当事業年度減少株式数(千株)	当事業年度末株式数(千株)
発行済株式				
普通株式(注) 1. 2.	15,577	—	14,019	1,557
合計	15,577	—	14,019	1,557
自己株式				
普通株式(注) 1. 3. 4.	681	1	614	68
合計	681	1	614	68

- (注) 1. 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。  
 2. 普通株式の発行済株式総数の減少14,019千株は株式併合によるものであります。  
 3. 普通株式の自己株式の株式数の増加1千株は、株式併合に伴う端数株式の買取りによる増加0千株及び単元未満株式の買取りによる増加1千株(株式併合前1千株、株式併合後0千株)によるものであります。  
 4. 普通株式の自己株式の株式数の減少614千株は、株式併合によるものであります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	29	2	平成29年3月31日	平成29年6月30日
平成29年10月31日 取締役会	普通株式	14	1	平成29年9月30日	平成29年12月1日

(注) 平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。「1株当たり配当額」につきましては、当該株式併合前の金額を記載しております。

(2) 基準日が当事業年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌事業年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成30年6月28日 定時株主総会	普通株式	44	利益剰余金	30	平成30年3月31日	平成30年6月29日

(注) 平成30年6月28日定時株主総会決議による1株当たり配当額には、特別配当10円を含んでおります。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金勘定	740百万円	718百万円
現金及び現金同等物	740	718

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

有形固定資産

主として、車両（車両運搬具）であります。

② リース資産の減価償却の方法

重要な会計方針「3. 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は資金収支計画に照らして、設備投資資金及び運転資金を銀行借入により調達しております。

なお、運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行と当座借越契約を締結しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形、電子記録債権及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、債権管理規程に従い、各事業部門において、取引先ごとに期日及び残高を管理するとともに、主な取引先の財務状況等を年度ごとに把握する体制としております。

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。当該リスクに関しては、管理部において定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況を把握する体制としております。

営業債務である支払手形、電子記録債務及び買掛金は、そのほとんどが6ヶ月以内の支払期日であります。

短期借入金及び長期借入金は、主に設備投資資金及び運転資金の調達を目的としたものであり、償還日は最長で決算日後7年であります。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前事業年度（平成29年3月31日）

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	740	740	—
(2) 受取手形	1,069	1,069	—
(3) 電子記録債権	421	421	—
(4) 売掛金	2,658	2,658	—
(5) 投資有価証券 その他有価証券	4	4	—
資産計	4,894	4,894	—
(1) 支払手形	668	668	—
(2) 電子記録債務	706	706	—
(3) 買掛金	830	830	—
(4) 短期借入金	350	350	—
(5) 長期借入金（※1）	2,060	2,059	△0
負債計	4,615	4,615	△0

（※1）1年内返済予定の長期借入金を含んでおります。

当事業年度（平成30年3月31日）

	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	718	718	—
(2) 受取手形	544	544	—
(3) 電子記録債権	1,376	1,376	—
(4) 売掛金	2,536	2,536	—
(5) 投資有価証券 その他有価証券	6	6	—
資産計	5,181	5,181	—
(1) 支払手形	722	722	—
(2) 電子記録債務	795	795	—
(3) 買掛金	881	881	—
(4) 短期借入金	450	450	—
(5) 長期借入金（※1）	1,830	1,837	6
負債計	4,680	4,687	6

（※1）1年内返済予定の長期借入金を含んでおります。



(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形、(3) 電子記録債権、(4) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(5) 投資有価証券

投資有価証券の時価について、株式等は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負 債

(1) 支払手形、(2) 電子記録債務、(3) 買掛金、(4) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(5) 長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
関係会社株式	47	47

関係会社株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「資産 (5) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権の決算日後の償還予定額

前事業年度 (平成29年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	740	—	—	—
受取手形	1,069	—	—	—
電子記録債権	421	—	—	—
売掛金	2,658	—	—	—
合計	4,890	—	—	—

当事業年度 (平成30年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	718	—	—	—
受取手形	544	—	—	—
電子記録債権	1,376	—	—	—
売掛金	2,536	—	—	—
合計	5,175	—	—	—

4. 長期借入金及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額

前事業年度 (平成29年 3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	350	—	—	—	—	—
長期借入金	599	485	380	277	187	129
合計	949	485	380	277	187	129

当事業年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	450	—	—	—	—	—
長期借入金	542	438	334	244	158	111
合計	992	438	334	244	158	111

(有価証券関係)

前事業年度（平成29年3月31日）

1. 子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額は子会社株式34百万円、関連会社株式12百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難であると認められることから、記載しておりません。

2. その他有価証券

	種類	貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの	株式	4	3	1
	合計	4	3	1

(注) 当該有価証券の減損処理に当たっては、時価が取得原価に比べて50%以上下落した場合は、原則として減損処理を行っております。

また、上記以外に下記の状態にある場合についても、原則として減損処理を行っております。

- ・過去2年間にわたり時価が取得原価に比べて30%以上50%未満継続して下落した場合
- ・株式の発行会社が債務超過の状態にある場合
- ・株式の発行会社が2期連続で損失を計上し翌期も損失が予想される場合

当事業年度（平成30年3月31日）

1. 子会社株式及び関連会社株式

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額は子会社株式34百万円、関連会社株式12百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難であると認められることから、記載しておりません。

2. その他有価証券

	種類	貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの	株式	6	4	2
	合計	6	4	2

(注) 当該有価証券の減損処理に当たっては、時価が取得原価に比べて50%以上下落した場合は、原則として減損処理を行っております。

また、上記以外に下記の状態にある場合についても、原則として減損処理を行っております。

- ・過去2年間にわたり時価が取得原価に比べて30%以上50%未満継続して下落した場合
- ・株式の発行会社が債務超過の状態にある場合
- ・株式の発行会社が2期連続で損失を計上し翌期も損失が予想される場合

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付企業年金制度を採用しております。

## 2. 確定給付制度

### (1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,052百万円	1,083百万円
勤務費用	58	58
利息費用	2	4
数理計算上の差異の発生額	0	84
退職給付の支払額	△31	△37
退職給付債務の期末残高	1,083	1,193

### (2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
年金資産の期首残高	1,057百万円	1,165百万円
期待運用収益	10	11
数理計算上の差異の発生額	15	29
事業主からの拠出額	113	113
退職給付の支払額	△31	△37
年金資産の期末残高	1,165	1,283

### (3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と貸借対照表に計上された退職給付引当金及び前払年金費用の調整表

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	1,083百万円	1,193百万円
年金資産	△1,165	△1,283
未積立退職給付債務	△82	△89
未認識数理計算上の差異	△7	△80
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△90	△170
前払年金費用	△90	△170
貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△90	△170

### (4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
勤務費用	58百万円	58百万円
利息費用	2	4
期待運用収益	△10	△11
数理計算上の差異の費用処理額	△2	△18
確定給付制度に係る退職給付費用	48	32

## (5) 年金資産に関する事項

## ① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
債券	48.0%	49.2%
株式	28.9	28.3
オルタナティブ投資	11.3	10.1
生命保険一般勘定	8.3	8.2
その他	3.5	4.2
合 計	100.0	100.0

(注) オルタナティブ投資は、主にヘッジファンド等への投資であり、複数の銘柄に分散して投資しております。

## ② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

## (6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

## 主要な数理計算上の計算基礎

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
割引率	0.39%	0.37%
長期期待運用収益率	1.0%	1.0%

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

## 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	1百万円	1百万円
賞与引当金	41	43
役員退職慰労引当金	10	13
減損損失	182	173
関係会社株式評価損	22	22
繰越欠損金	406	178
その他	39	36
繰延税金資産小計	704	469
評価性引当額	△602	△339
繰延税金資産合計	102	130
繰延税金負債		
前払年金費用	△27	△51
圧縮記帳積立金	△1	△1
除去債務資産	△0	△0
株式等評価差額金	△0	△0
繰延税金負債合計	△29	△54
繰延税金資産 (△は負債) の純額	72	75

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.7%	30.7%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.4	0.4
住民税均等割	5.3	4.1
評価性引当金の増減	△25.4	△21.7
試験研究費の特別控除等	△3.7	△2.7
その他	△0.8	△0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	6.5	10.8

(持分法損益等)

前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

当社が有している関連会社は、利益基準及び利益剰余金基準からみて重要性が乏しい関連会社であるため、記載を省略しております。

当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

当社が有している関連会社は、利益基準及び利益剰余金基準からみて重要性が乏しい関連会社であるため、記載を省略しております。

(企業結合等関係)

該当事項はありません。

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(公共施設等運営事業関係)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、各事業部門において集成材等を使用した住宅部材を品目別に生産販売しております。

当社は、集成材等を使用した住宅部材の生産販売を行う「内装建材事業」、「木構造建材事業」の2つの事業を報告セグメントとしております。

「内装建材事業」は、内装部材（階段・手摺・カウンター・和風造作材・框・洋風造作材）の生産販売、「木構造建材事業」は、構造部材（プレカット加工材・住宅パネル）の生産販売を行っております。なお、「木構造建材事業」には施設建築及び住宅構造躯体の建て方請負いも含まれております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「重要な会計方針」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部売上高又は振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報  
前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2・3	財務諸表 計上額 (注) 4
	内装 建材事業	木構造 建材事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	8,048	5,458	13,507	10	13,518	—	13,518
セグメント間の内部売上高 又は振替高	3	6	9	—	9	△9	—
計	8,052	5,464	13,517	10	13,528	△9	13,518
セグメント利益	238	109	347	6	354	—	354
セグメント資産	3,273	2,226	5,499	149	5,649	5,485	11,134
その他の項目							
減価償却費	155	123	279	3	282	7	289
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	59	129	189	—	189	7	196

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、その内容は、賃貸事業であります。

2. 売上高の調整額は、セグメント間の取引消去であります。

3. セグメント資産及びその他の項目の調整額は本社管理部門及び全社共用資産等であります。

4. セグメント利益の合計額は、損益計算書の営業利益と一致しております。

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2・3	財務諸表 計上額 (注) 4
	内装 建材事業	木構造 建材事業	計				
売上高							
外部顧客への売上高	8,391	5,679	14,070	19	14,090	—	14,090
セグメント間の内部売上高 又は振替高	0	7	8	—	8	△8	—
計	8,391	5,687	14,079	19	14,098	△8	14,090
セグメント利益	303	76	380	12	392	—	392
セグメント資産	3,328	2,223	5,552	146	5,698	5,876	11,575
その他の項目							
減価償却費	143	132	276	2	279	6	285
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	90	214	304	—	304	3	308

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、その内容は、賃貸事業であります。

2. 売上高の調整額は、セグメント間の取引消去であります。

3. セグメント資産及びその他の項目の調整額は本社管理部門及び全社共用資産等であります。

4. セグメント利益の合計額は、損益計算書の営業利益と一致しております。

【関連情報】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の氏名又は名称	売上高	関連するセグメント名
稲畑産業㈱	2,816	内装建材事業、木構造建材事業

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の氏名又は名称	売上高	関連するセグメント名
稲畑産業㈱	2,695	内装建材事業、木構造建材事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

(単位：百万円)

	内装建材事業	木構造建材事業	その他	全社・消去	財務諸表計上額
減損損失	—	—	—	34	34

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、その内容は賃貸事業であります。

2. 各報告セグメントに配分していない全社資産に係る減損損失であります。

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項ありません。

(1株当たり情報)

項目	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	3,919円45銭	4,113円96銭
1株当たり当期純利益金額	178円90銭	223円48銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。

(注) 1. 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っております。前事業年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額を算定しております。

2. 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益金額 (百万円)	266	332
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る当期純利益金額 (百万円)	266	332
期中平均株式数 (千株)	1,489	1,489

(重要な後発事象)

該当事項はありません。



## ⑤【附属明細表】

## 【有価証券明細表】

## 【株式】

投資有価証券	その他有価証券	銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)
		大東建託(株)(協力会持株会)	332	6
		計	332	6

## 【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 却累計額又は 償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末残 高 (百万円)
有形固定資産							
建物	3,256	23	5	3,274	2,367	60	906
構築物	710	—	—	710	651	6	59
機械及び装置	3,672	296	130	3,838	3,358	160	480
車両運搬具	21	0	1	20	17	2	2
工具、器具及び備品	151	3	0	154	145	6	8
土地	2,876	—	—	2,876	—	—	2,876
リース資産	52	26	—	78	28	12	50
建設仮勘定	69	227	296	—	—	—	—
山林	11	—	—	11	—	—	11
有形固定資産計	10,822	576	434	10,965	6,568	248	4,396
無形固定資産							
ソフトウェア	568	60	6	622	531	38	90
その他	54	16	49	21	3	0	17
無形固定資産計	622	77	56	643	535	38	108
長期前払費用	3	2	0	6	0	1	3

(注) 当期増減額のうち主なものは下記のとおりであります。

建物	増加額(百万円)	美濃加茂第3工場	15
	減少額(百万円)	七宗第1工場	3
機械及び装置	増加額(百万円)	美濃加茂第4工場 美濃加茂第1工場	215 41
	減少額(百万円)	美濃加茂第4工場 七宗第1工場	100 23
ソフトウェア	増加額(百万円)	岐阜県美濃加茂市 美濃加茂第4工場	24 14
	減少額(百万円)	美濃加茂第4工場	6
その他の無形 固定資産	増加額(百万円)	美濃加茂第1工場	6

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	350	450	0.3	—
1年以内に返済予定の長期借入金	599	542	0.9	—
1年以内に返済予定のリース債務	10	14	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	1,460	1,288	0.8	平成31年～ 平成37年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	30	40	—	平成31年～ 平成35年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	2,450	2,335	—	—

- (注) 1. 平均利率を算定する際の利率及び残高は、期末の数値を使用しております。なお、リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を貸借対照表に計上しているため、「平均利率」を記載していません。
2. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の貸借対照表日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	438	334	244	158
リース債務	15	12	7	3

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	5	5	—	5	5
賞与引当金	135	143	135	—	143
役員退職慰労引当金	33	10	—	—	44

(注) 貸倒引当金の「当期減少額（その他）」は、一般債権の貸倒実績率による洗替額によるものであります。

【資産除去債務明細表】

当事業年度期首及び当事業年度末における資産除去債務の金額が、当事業年度期首及び当事業年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、財務諸表等規則第125条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

① 流動資産

イ. 現金及び預金

区分	金額 (百万円)
現金	0
預金	
当座預金	710
普通預金	7
別段預金	0
小計	718
合計	718

ロ. 受取手形

相手先別内訳

相手先	金額 (百万円)
双日建材(株)	195
(株)アルボレックス	69
東京グラスロン(株)	56
北恵(株)	45
伊藤忠建材(株)	30
その他	145
合計	544

期日別内訳

期日別	金額 (百万円)
平成30年4月 (注)	116
5月	205
6月	58
7月	163
合計	544

(注) 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、4月期日の金額には期末日満期手形72百万円が含まれております。

ハ. 電子記録債権

相手先別内訳

相手先	金額 (百万円)
稲畑産業(株)	813
(株)飯田産業	278
ナイス(株)	75
(株)ジュウテック	72
ジャパン建材(株)	52
その他	83
合計	1,376

期日別内訳

期日別	金額（百万円）
平成30年4月（注）	372
5月	439
6月	96
7月	468
合計	1,376

（注） 期末日満期電子記録債権の会計処理については、現金決済日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、4月期日の金額には期末日満期電子記録債権231百万円が含まれております。

ニ. 売掛金

相手先別内訳

相手先	金額（百万円）
稲畑産業(株)	256
(株)エヌ・シー・エヌ	242
パナソニック(株)	203
(株)レオパレス21	184
一建設(株)	180
その他	1,468
合計	2,536

売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

当期首残高 （百万円）	当期発生高 （百万円）	当期回収高 （百万円）	当期末残高 （百万円）	回収率（％）	滞留期間（日）
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A) + (B)} \times 100$	$\frac{(A) + (D)}{2} - (B)$ 365
2,658	15,215	15,338	2,536	85.8%	62.3

（注） 消費税等の会計処理は税抜方式を採用しておりますが、上記金額には消費税等が含まれております。

ホ. 商品及び製品

品目	金額（百万円）
商品	
住宅部材	—
製品	
内装部材	245
構造部材	0
合計	246

ヘ. 仕掛品

品目	金額（百万円）
内装部材	200
構造部材	147
合計	347

ト. 原材料及び貯蔵品

品目	金額（百万円）
原材料	
原板	80
芯材	516
合板	50
単板	27
その他	54
小計	730
貯蔵品	
補助材料（塗料及び接着剤他）	11
消耗工具その他	11
小計	22
合計	753

② 流動負債

イ. 支払手形

相手先別内訳

相手先	金額（百万円）
サンユーペイント(株)	105
岩谷産業(株)	82
(株)共進ペーパー&パッケージ	75
飛州木工(株)	75
(株)梶谷集成材	41
その他	340
合計	722

期日別内訳

期日別	金額（百万円）
平成30年4月（注）	173
5月	289
6月	55
7月	201
8月	1
合計	722

（注） 期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、4月期日の金額には期末日満期手形115百万円が含まれております。

ロ. 電子記録債務  
相手先別内訳

相手先	金額（百万円）
(株)大三商行	189
住友林業(株)	94
ファイン工業(株)	86
SMB建材(株)	75
新栄合板工業(株)	58
その他	291
合計	795

期日別内訳

期日別	金額（百万円）
平成30年4月（注）	183
5月	246
6月	116
7月	247
8月	2
合計	795

（注） 期末日満期電子記録債務の会計処理については、現金決済日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、4月期日の金額には期末日満期電子記録債務65百万円が含まれております。

ハ. 買掛金

相手先	金額（百万円）
SMB建材(株)	164
都築木材(株)	79
(株)エヌ・シー・エヌ	58
飛州木工(株)	51
稲畑産業(株)	40
その他	486
合計	881

(3) 【その他】

当事業年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当事業年度
売上高（百万円）	3,213	6,732	10,445	14,090
税引前四半期（当期）純利益金額（百万円）	56	152	262	373
四半期（当期）純利益金額（百万円）	36	103	189	332
1株当たり四半期（当期）純利益金額（円）	24.53	69.48	127.52	223.48

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額（円）	24.53	44.95	58.05	95.96

（注） 当社は、平成29年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を行っており、当事業年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定し、1株当たり四半期（当期）純利益金額を算定しております。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り  取扱場所  株主名簿管理人  取次所  買取手数料	愛知県名古屋市中区栄三丁目15番33号 三井住友信託銀行(株) 証券代行部  東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行(株)  無料
公告掲載方法	当社の公告は、電子公告により行う。やむを得ない事由により、電子公告によることができない場合は日本経済新聞に記載する方法により行う。 公告掲載URL <a href="http://www.pronexus.co.jp/koukoku/7896/7896.html">http://www.pronexus.co.jp/koukoku/7896/7896.html</a>
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 1. 当社定款の定めにより、株主の有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を有しておりません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
  - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
  - (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
2. 平成29年5月16日開催の取締役会決議により、1単元の株数を1,000株から100株に変更しております。  
なお、実施日は平成29年10月1日であります。
3. 特別口座に記録されている株式については、特別口座の管理機関である三井住友信託銀行(株)（東京都千代田区丸の内一丁目4番1号）で受付いたします。

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第58期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）平成29年6月29日東海財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成29年6月29日東海財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第59期第1四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日）平成29年8月10日東海財務局長に提出

（第59期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日）平成29年11月10日東海財務局長に提出

（第59期第3四半期）（自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日）平成30年2月9日東海財務局長に提出

(4) 臨時報告書

平成29年6月29日東海財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使結果）の規定に基づく臨時報告書であります。

平成30年6月28日東海財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使結果）の規定に基づく臨時報告書であります。



## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	東海財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【会社名】	セブン工業株式会社
【英訳名】	SEVEN INDUSTRIES CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 田中 太郎
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	岐阜県美濃加茂市牧野1006番地
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号) 株式会社名古屋証券取引所 (名古屋市中区栄三丁目8番20号)

## 1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長田中太郎は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

## 2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠いたしました。

本評価においては、財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及び棚卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスや、リスクが大きい取引を行っている業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

## 3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

## 4 【付記事項】

該当事項はありません。

## 5 【特記事項】

該当事項はありません。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月28日

セブン工業株式会社  
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 松本千佳 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 馬淵宣考 印

## <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているセブン工業株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第59期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

## 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

## 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

## 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、セブン工業株式会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、セブン工業株式会社の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、セブン工業株式会社が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

当社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- (注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が財務諸表及び内部統制報告書に添付する形で別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。